
イタズラ男と黒タイツ男

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イタズラ男と黒タイツ男

【Nコード】

N8277Z

【作者名】

シュウ

【あらすじ】

イタズラ好きでドSな男子高校生の隆と、黒タイツ大好きな変態男子高校生の拓馬。

そんな二人につっかかってくる美少女の名波。その名波を影で応援しているファンクラブのメンバー。

登場人物が変な人で固められた学園コメディです。

シリアス？おいしいんですか？

でははじまりはじまりー

黒タイツにかける情熱

「人生ってなんだろう？」

「は？」

教室で授業を受けていたら、いきなり話を振られた黒髪のだるそうな少年・相沢隆。あいさわ たかし

その突拍子もない会話を振ってきた茶髪の明るすぎる少年・木下拓馬。きのした たくま

通路を挟んで席が隣同士の二人は仲が良かった。

「だーかーらー。人生ってなんだろう？」

「別に聞こえなかったわけじゃねーよ。質問があまりに唐突すぎて意味がわかんねえだけだ」

「さいですか。じゃあなんだろう？」

「あー・・・」

めんどくさそうに考え始める隆。なんやかんや言っても友達想いな彼は拓馬の友達であり幼馴染であり大親友です。

「楽しむコトじゃね？」

「その心は？」

「いや、今のが心の部分だけだな。毎日笑って暮らしていければそれはそれで良い人生になりそうじゃん？」

「さすが隆！」

「じゃあ拓馬はどうなんだよ」

「黒タイツかな」

さして迷った様子もなく、軽快かつ大胆に答える。そんな拓馬を見

て隆はため息を漏らす。

木下拓馬は、壮絶な黒タイツフェチなのである。高校2年でもはや女性の足に興味があるのはどうかと思うが、相当な変態である。

「それにしてもいい時代になったもんだよなあ」

そう言つて前のほうをうつと見つめる拓馬。

真ん中よりもやや後ろに位置している二人の席から前を見ると、同い年の女子生徒が見える。全然普通の光景ではあるのだが、そこは黒タイツ拓馬である。女子生徒の顔や胸、背中や髪など全てをスルーして、足だけを見定めている。

季節は秋も深まりし11月。自然と女子生徒たちも冬服の上にコートを着たりして防寒対策をし始める季節だ。

しかし腰から下のスカートから伸びている部分は隠しようがない。そこで上からジャージを履いてくる生徒もいるが、大半はタイツである。さらにその大半が黒いタイツを履いている。

拓馬にとっては冬という季節はパラダイスだった。北国パラダイスだった。

そして隆の3つ前の席に座っている黒髪の美少女の女子生徒こそが、拓馬好みの足をもつ生徒だった。

「はあ」

うつとりと眺める拓馬から桃色の吐息が漏れた。その瞬間、見られていた女子生徒がブルっとからだを震わせた。

「拓馬。キモイからやめろ」

「隆にはまだわからないんだな。よし、ちょっと待ってろ」

そう言つてノートにせかせかと何かを書き始める拓馬。

こんな拓馬に慣れている隆は、無視して黒板の文字をノートに書き込んでいく。

授業が終わり、拓馬のもとへと一人の例の女子生徒がツカツカ・・・いや、ズンズンと歩いてきた。

「ちよつと木下！ また変なこと考えてたでしょ！」

「誰がお前の足なんか見て欲情するかよ！」

「うそつけ」

「ちよつと！ 欲情って・・・この変態！」

「だからしてねえって言ってるだろ！ そんなことより隆、これ読んでろ」

隆の小さなツツコミを無視して、女子生徒と拓馬はケンカ腰で会話を始めた。

これもいつものことなので、隆は二人の声をBGMにして拓馬から渡された紙を読み始めた。

「ブハッ！！」

吹き出すのも無理はない。拓馬から渡された紙には、黒タイツの魅力についてが汚い字でびっしりと書かれていた。

ザックリとななめ読みをしていくと、途中から噂の女子生徒・黒木名波ななみの話になっていた。黒タイツのことを何も知らない人がこの文章から読み始めたら、ラブレターか何かだと思ってしまうような内容だった。

そして最後の一文はこう書かれていた。

『木下拓馬は黒木名波の足を愛してます』

もうこれはダメだと思う。

しかしここで終わらないのが黒タイツ拓馬の親友である隆である。隆はイタズラ好きで有名である。

この前も同じのクラスの男子の一人が生贄となつてしまい、カバンの中がゲームのケースでたくさんになっているという事件が起こった。

中身は空っぽでケースだけが大量に入っていた。それを運悪く先生に見つかってしまったのである。

犯人が名乗り出てこなかったことから、この事件は迷宮入りなってしまったが、クラスの生徒たちは皆、犯人が隆であることが分かっていた。

なんやかんやで、皆も変わったことが好きなので、先生の犯人探しに手伝うようなことはせずに『小さいおっさんじゃね?』とか『さつきゲーム会社の人が来てたよ』とか適当なことを言っていた。

この事件を『ゲームケース混入事件』と名付けられてクラス内で処理された。

しかしカバンに入れられた生徒だけが先生に呼び出されてしまったのは内緒。

そんな隆が今回思いついたイタズラ。

「黒木。これやるよ」

「え? なにこれ?」

「あああああああああああああああああ!」

隆が渡したのはもちろん拓馬から受け取った紙である。

問答無用で渡す隆。それを絶対死守しようとして教室を揺らす勢いで大声を上げた拓馬。

今二人の戦いが幕を開ける。・・・わけもなく、あっさりと名波へ

と紙が渡ってしまった。

隆 WIN

隆のパーフェクト勝利であつた。

「・・・相変わらず黒タイツ好きね。・・・ってなんですとおおおおおお！？」

きつと最後の文を目にしたであろう名波が、美少女の異名からは想像できないような大音量の声が教室に響いた。

全力全開で真っ赤になる名波。それを見てしてやったりの表情をしている隆。隣の席で顔を逸らして口笛を吹いている拓馬。

今日も世界は平和である。

黒タイツにかける情熱（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変感謝感激します。

さて新作です。

初めて読んでいただいた方は初めまして。前回から読んでいただいている方はまたよろしく願いいたします。

前作とは全く違う感じ（？）で今回もコメディ（笑）を始めていきます。

では次回もお楽しみに！

仲良し三人組

「あ、あんた、私のこと、すすす、す、好きって、ど、どういうことだよ！」

どもりまくりの噛みまくりで聞きづらかったが、美少女女子高生の名波は顔を真っ赤にして拓馬に聞いた。

聞かれた本人は彼女の間違いに気がついていたので、慌てて訂正に入る。

「おいバカ。ちゃんと読んでみる。俺はお前の足が好きだけで、お前のこと自体は特になんとも思っていないわ」

ここだけ聞くとただの照れ隠しにしか聞こえないが、木下拓馬は筋金入りの変態である。

彼を見ても呆れた表情でただ訂正しているだけといった感じである。しかし名波のほうは頭が混乱してしまっている。これだけの美少女でありながら、中身はとても純粋な女の子である。同じクラスの変態だと思っていた男子から急に告白まがいのことを言われたら、それはもう頭の中が真っ白にはなるし、動揺しているもしてしまう。何をどうしたいのかよくわからない状態に陥っていた。

そんな二人の対照的な表情を見て隆はとても幸せだった。

「拓馬。黒木、聞こえてないぞ？」

「え？ うわっ！ ホントだ！ おい、目を覚ますんだ！」

何をどうしたらこうなるのかわからなかったが、名波は頭から煙を出さんばかりのショートを起こしていた。

そんな名波の両肩を拓馬が掴んで前後に揺らす。

ぐわんぐわんと首が動いて、外れていたネジが戻ってきたらしく名波が戻ってくる。

「・・・はっ！ 気安く触らないでよ、変態！」

正気を取り戻した名波がビシバシと拓馬を叩いて離れる。

「なんなんだよ。相変わらず意味不明な女だな」

「意味がわからないのは木下でしょ」

「どこがわからないっていうんだよ」

「そうだな。拓馬の頭は単純だ。主に黒タイツのことしか考えてない」

「そこが変なのよ！」

若干ヒステリックになりつつある名波。

確かに正論だった。そんな黒タイツのことばかり考えている高校生はどう見ても変だ。

しかしそんな罵倒も真の変態である拓馬には全く通用しなかった。

「変ってなんだ！ 人の趣味をとにかく言わないでいただきたい！」

紳士な姿勢で挑む拓馬。まさに変態と言う名の紳士である。

「ねえ、相沢あ、助けてえ」

間延びした声で少し涙を浮かべた目で、隆を見上げるように助けを求める名波。

隆は拓馬と違って、美少女のそんな姿を見てなんとも思わないわけではない。

黒木名波は学校中を探し歩いても見つからないくらいの抜群の美少

女だ。そんな美少女が自分に助けを求めてきている。もの凄いい状態だった。

「黒木」

「何？」

自分の名前を呼ばれて、ついにやってきた助け舟に目を輝かせる。

「耐えろ」

「そんなことだろうとは思ってたよ！」

しかしやってきた助け舟は海賊船だった。

相沢隆はイタズラ好きであると同時に、『かわいい子が悔しがる表情が大好き』という性癖を持っている。

つまりところ本質はDSなのであった。

めんどくさがりでイタズラ好きでDSな隆と、変態紳士で黒タイツ大好きな拓馬。

そんな二人にからかわれているような名波。

周りから見ているとただの仲良し3人組なのだが、現状は名波がいじられているだけなのである。

しかし名波も名波で何度も二人にちょっかいを出しに行っているの
で、二人の中では『黒木M説』が浮上しつつあった。

隆の中では『いじられてもめげない美少女』、拓馬の中では『黒タイツの似合う美少女』という扱いになっていた。

言い方はアレだが、性的に繋がっている関係だった。

「もういいわよ！ あんたたちに声をかけた私が悪かったのよ！」

「「なんで怒ってるんだ？」」

隆と拓馬が名波に対して同時に言った。

「怒ってないわよ！　いつも通りですよー！」

キンコンカーンコン

チャイムという名のコングが鳴って短い休み時間の闘いが幕を閉じた。

仲良し三人組（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

毎日投稿は無理でした！てへべろ（＾q＾）

次回もお楽しみに！

ストーキング オン ストーキング

学業という学生の仕事が終わりに、意気揚々と帰っている生徒の群れの中で、たった一人だけ浮かない顔をしている生徒がいた。もちろん変態の拓馬である。

「あーあ。学校の授業が24時間授業ならいいのになー」
「それだと寝る時間が無いだろ」

隣を歩くのは拓馬の大親友でお馴染みの隆。いつものように適当に拓馬との会話のキャッチボールに付き合う。
拓馬は学校が終わるといつもこんな感じである。
理由はもちろん・・・

「一日中黒木の黒タイツを履いた足を見ていたい！」
「大声で言つな。気持ち悪いだろ」

とのこと。

「隆くん。そこは気持ち悪いじゃなくて迷惑になるーとかだろ？」
「いや、気持ち悪いし。お前が変態発言するときは、大抵赤の他人のフリしてるから俺は迷惑じゃないし。良かったな、こんなにお前のことを心配してくれる友達はいないぞ？」
「おお！ さすが隆くん！ そうやって遠まわしに人のことをバカにするのは良くないぞ」

なんかかんやと盛り上がっている二人の後ろから一つの影が見ていた。

「私の名前が出てきたから誰かと思って追いかけてみたら、またあいつら・・・」

電柱の影からストーキングするように見ているのは、我らがアイドル黒木名波でした。

実はその後ろには数人があとを付けていたりするのは、また別の話。

「うーん・・・この距離じゃ何話してるのか聞こえない・・・」

若干遠い距離感を保っている名波は、二人の会話が聞こえていないことに少し苛立ちを覚えていた。

そんなイライラを解決する方法は簡単である。二人の会話に混ざればいいのだ。

しかし名波もそんなことは分かっていた。それができないからイライラしているのだ。

もしもこのまま二人の会話に混ざってしまえば、今日の休み時間の時のように弄ばれるのは目に見えている。

しかし気になる。どうしようもないパラドックスに名波は困り果てていた。

しゃがんだ体勢で隠れている電柱から身を現し、次の電柱へと移動しようとした。

その時！

前を歩いていた二人が突然後ろを振り返って全力疾走でこちらに向かってきた。

突然の事態に驚いた名波は身動き一つ出来ずに、立ち上がろうとした中腰の姿勢のままで固まってしまった。

全力疾走してきた二人は名波の脇の下から手を突っ込み、持ち上げるようにして立ち上がらせた。

「ちょ、ちよっと！どこ触ってるのよ！」

「はいストーカー逮捕ー」

「はいはい大人しくしてねー」

隆、拓馬の順でそれぞれ警官の真似をしながらニヤリと笑う。

名波のストーキングはバレバレでした。

二人は名波が電柱から出てきたところを捕獲する算段を立てながら歩いていたのです。

「君ねー。ストーカーは立派な犯罪だよ？」

「現行犯だから言い訳はできないからな」

「私ストーカーなんかじゃないし！」

「みんな最初はそうやって言っただよ」

「本人たちに了承を得ないであとを付けているのはストーキングではないと？ 困りましたな、相沢警部」

「そうですね。本人に自覚が無いのは困りますな、木下警部」

互いを警部と呼び合う二人。

木下警部は携帯を取り出して、無線で何かと話しているフリをする。その間も名波を拘束している手を放すことは無い。

「ちょっと！いい加減に離してよ！あんたらがどこ触ってるかわか
つてるの？」

「二の腕」

「脇」

拓馬、隆の順で答える。

「そうじゃないでしょ！女子高生のからだをさわってんのよ！この
状態だけ見たら逮捕されるのはどっちよ！」

名波を左右両側から、『宇宙人確保』というような感じで持ち上げているため、どうみても名波が怪しい二人組に連れて行かれそうになっっている状態だった。

しかし当の本人たちは全くあんなことやそんなことをするつもりはないので、恥ずかしさややらしさなどを垣間見せることすらなかった。しかも名波が暴れすぎているせいで周りを歩く生徒たちも『仲良しな三人組だ』と呟きながら通り過ぎていく。

「これだから素人は困るよ」

「・・・どういうことよ」

空いている手で頭をかきながら拓馬が言う。

「俺たちはお前をストーキングしている奴らがいるから、こうしてお前のところに走ってきてやったんだぞ」

「え？」

名波はここで初めて自分がストーキングされていたことを知った。実は三人が通っている学校には『黒木名波ファンクラブ』なるものが設立していた。その話は別の機会にゆっくりと。

そして今回ストーキングをしていたのは、その中でも熱狂的な名波ファンのメンバーであった。

「もしかしてお前気づいてなかったのか？」

「う、うん」

「そうか。少しは感謝する気になったか？」

まさか自分がストーキングされていたとは露知らず、二人をストーキングしていたとは・・・

二人に助けられて少し見直した名波。

「黒木。木下。二人ともありがと。ちょっと二人の印象が変わったわ」

そう微笑んでお礼を言う名波。

二人も少し微笑んで、名波の腕を掴んだまま、からだの周りをぐるりと回転してからだを前後180度回転させた。

なんでぐるりと回ったのか分からない名波。

そしてさっきの微笑みよりも少し悪意のこもった微笑みを見せる拓馬と隆。

そして名波のからだをグイッと持ち上げてゆっくりと前進。

徐々に上がっていくスピード。

「え、ちょっと、どこ行くの？」

なんとなく分かっているながらも名波が二人に問う。

しかし返事は返ってこず、スピードがまた少し上がる。

美少女と呼ばれる名波のからだは見た目通り軽いので、男子高校生二人なら簡単に運べてしまう重さだった。

「ぎゃあああああ!!」

さらに笑顔になり、小走りだったスピードを駆け足のスピードまで上げる。

もちろん向かっているのはファンクラブのストーキング部隊の皆様のところ。

ストーキング部隊のみなさんは、二人の微笑みに恐怖を感じてすでに退避を始めていて、集団で固まって逃げている。

それを追っている二人と、半泣きの状態で二人に持ち上げられている名波。足が宙に浮かび上がるくらいまで持ち上げられているので

どうしようもない。

「アハハハハハハハハハハ！！！！」

ついに笑い出した二人。しかしスピードを緩めることなく、辺りには名波の悲鳴と二人の悪魔のような笑い声が響きわたっていた。

その追いかけてこは二人の足に名波の宙に浮いた足が絡みついて、三人が派手に転倒するまで繰り返されたとか何とか。

ストーキング オン ストーキング（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

順調です。

黒木名波ファンクラブについてはまたの機会に。

次回もお楽しみに！

黒木名波ファンクラブ

「それでは会長、お願いします」

ここは北海道某所にある黒木名波ファンクラブ本部。とある1LDKのマンションの一室にその本部はある。

部屋の中には9人の会員と呼ばれる男達が、行儀良く3×3で整列して三角座りで座っていた。その整列している男たちの前には、女性が一、男が二人立っている。

その中の女性に会長と呼ばれた男の一人が、全員の前に立って話し始める。

「えー、本日皆に集まって貰ったのは他でもない。まずはこれを見せてくれ」

そう言うのと、もう一人の男が持っていたiPadを指さす。そこには今日の学校帰りにファンクラブの会員が撮影したであろう映像が流れ始めた。

一通り流れ終わると、会長が話を再開する。

「今見てもらったのは、今日の学校帰りに名波姫を尾行していた会員が、例の二人組によって捕獲されてしまった名波姫とともに追いかけられたのを、この幹部が撮影したものである」

幹部と呼ばれた女性は小さく頭を下げた。

「君はこの映像を見てどう思う？」

「滑稽だと思います！」

質問を振られた会員の一人が素早く元気に答える。

「そうだな。普通ならば尾行がバレた彼らをそう思うかもしれない。しかしここで注目すべきは名波姫の表情だ！」

力強く握り締めた拳を天井へと掲げる。

「名波姫の表情を見てみる！ 今にも泣きそうではないか！ これは我々の母性本能・・・いや父性本能をくすぐられはしないか？」

「たしかに・・・」

「これはそそる！」

「守ってあげたい！」

「泣いたらダメだー！」

会長が指摘すると、会員達が口々に声を上げる。

この『黒木名波ファンクラブ』とは、名波がいつも拓馬と隆にいじめられていることをきっかけに発足されたもので、名波の可愛らしく愛嬌のある笑顔や美しい表情を守りたいが一心で集まった会員によって構成されており、構成員は、会長、幹部・男女各1名、会員・9名の計12人からなるものである。もちろん全員が名波や拓馬、隆と同じ高校の人間である。

主な活動としては、名波を遠くから観察し、名波に近づく害敵を近づけさせないようにすることである。

しかし、名波に寄ってくるものは対処できるのだが、名波本人から近づいていってしまったっている拓馬と隆の二人には、ファンクラブのメンバーも頭を悩ませていた。

そんな時に起こった今日会員の数名が襲われるという事件。

たまたまその現場に居合わせた女性幹部が撮影していたので、それを題材にして話し合いの場を設けたのであった。

「さて、ここからが本題だが、この二人に関して何か得策がある者はいないか？」

「・・・はい」

そう問いかけると、会員の一人がおずおずと手を挙げた。

「その二人に何か名波姫に近づかないようにと警告をするのはどうでしょうか？」

「警告か・・・」

普段ファンクラブのメンバーが害敵を近づかせないようにする方法としては、近づこうとしている人間に声をかけて近づくタイミングをなくしたり、名波の近くで立ち話をして自分たちのからだでバリケードを作ったりしている。主に『さりげなく』することが基本だった。

「しかし警告をしてしまうと、もしかしたら二人から名波姫の耳に入ることがあるのではないか？」

「でもこの状況は明らかに異常だ！」

「このままでは名波姫がかわいそうだ」

「早く手を打つべきだ」

「いやここは慎重に・・・」

会員達があーでもないこーでもない議論を始めた。その様子をじつくりと眺める会長。

その会長に男性幹部が小声で話かける。

「どう思いますか、会長」

「たしかに警告をするのもいい案だと思う。しかし我らのモットーである『清く正しく裏方に』を破ってしまうことになるのは避けた

い」

「つまり警告をするのには反対ということですか？」

うむ、と頷く会長。そのことを男性幹部が議論でヒートアップしている会員に伝える。

少しガツカリする最初に警告の案をだした会員派数名と『当たり前だ』と言わんばかりに胸を張っている数名の会員。残りの他の会員はどちらとも言えないような気持ちだったらしい。

会長と幹部達同様、会員達もこの二人のことをなんとかしないといけないことは重々分かつている。

しかし具体策がないのだ。どうしたらいいのかということとで皆が日夜頭を悩ませている。

そして訪れる沈黙。こんな時は天使が近くを通っている瞬間らしい。

「会長。ここは一つ、私の考えを聞いてもらってもいいですか？」

そう言っただけで天使ごと沈黙を切り裂いたのは女性幹部だった。

男性幹部は、ファンクラブ創設者である会長と共に創設したこともあり幹部という立場にいるが、この女性幹部は、唯一の女性会員でありながら名波を思う気持ちが半端なく強いことと、名波に一番近い存在ということもあって、幹部として他の会員よりも上の立場に立っている。つまり実力で幹部になったのである。

「どんな案だ？ 言ってみろ」

「それはですね・・・ここによごーによごーによ・・・と言う作戦です」

他の会員たちにも聞こえるように説明する。

「ふむ」

「それは良い作戦だ！」

「さすが女幹部！」

「そこにシビれる懂れる！」

「考えることが違うぜ！」

大声で女性幹部を褒め称える会員達。

その瞬間。

ドンッ！！

「うるせえぞ！ 静かにしろっ！」

あまりに騒ぎすぎてしまったためにお隣さんから壁を叩かれた上に、壁の向こうから罵声まで浴びせられてしまった。

全員が静まり返った。

こんな状況でも天使は通るのだろうか？

「では明日女幹部の作戦を実行に移す。今日はこれで解散だ」

会長がそう言うと、また騒いで怒られないように、静かに行動して部屋を出ていく会員と幹部達。

そして部屋には会長ただ一人になる。

部屋の主である会長こと吉永春樹は、まだ見たことのないお隣さんに恐怖を抱きながら、コップに冷蔵庫から出したお茶を静かに注いで喉を潤した。

そして冷静になった春樹は心の中で考える。

『なんかさつきは勢いでイける！ とか思っちゃったけど、女幹部の作戦・・・失敗しそудな』

春樹は二人の関係と名波の関係を思い出しながらそう思った。

ファンクラブ会長は意外と冷静で気弱な人間でした。

黒木名波ファンクラブ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が半端なく高まります。

今回はファンクラブの話でした。

実は三人と同じクラスの会員もいるのですが、それは秘密集団なので誰が会員なのかはわかりません。

名波姫を護るはファンクラブの使命！

では次回もお楽しみに！

イタズラの代償

名波を拓馬と持ち上げて走った翌朝。

隆は両腕筋肉痛という緊急事態に陥っていた。二の腕はもちろん、手首から肘にかけての前腕も痛かった。

箸をもつのが痛い。

カバンを持つために腕を曲げ伸ばしするときの動作が痛い。

よっこらせと椅子に座るときにする腕の動作が痛い。

それよりなにより一番辛かったのが、歯磨きだ。

あの時間だけは本当に苦痛だった。我が家にお口クチュクチュモンダミンが無いことをあんなに悔しく思った日はなかった。

教室に入るなり、隆が自分の席で大人しく座っていたら、拓馬の能天気な声が聞こえてきた。

「隆くん！ おはようございますー！」

拓馬は元気よく挨拶すると、駆け寄ってきた勢いそのままに隆に飛びつく。

隆は飛びついてきた拓馬を条件反射のごとく横に叩き落とす。

後ろの机を巻き込んで派手に倒れる拓馬。叩いた拍子に筋肉痛で苦痛の表情を浮かべる隆。

「何で叩くんだよ。危ないじゃないか」

「お前の頭の中だけで十分犯罪級なのに、行動まで危なくなるじゃねえよ。こちとら筋肉痛と朝からタイマン張ってんだ」

「筋肉痛？」

「昨日黒木担いで走ったじゃん。あれが両腕に響いてて痛いんだ・・・」

やっと痛みが引いてきたらしく、深呼吸をして呼吸を整える隆。

「そんなに痛いのか？」

自分の席に座って軽い口調でそう言つと、隆の腕に触ろうと手を伸ばす。しかし触る前に隆の右手にその手を払われてしまう。その瞬間、再び激痛が隆の右手に走る。

痛がつている隆を見て笑いながら拓馬が一言。

「俺の右手が疼いているー！　って感じだな」

「疼いてるんじゃないくて暴れてるんだよ！　大暴走だよ！　・・・
つてお前は筋肉痛とかになつてないのか？」

「だって俺は鍛えてるもん。あのくらいじゃへこたれないぜ！」
「それもそうか」

そう言つて力こぶを作るポーズをしてみせる拓馬。

175CMぐらいと同じような身長 of 二人は、隆が顔は整っているが草食系男子さながらのヒョロ男であるのに対し、拓馬は笑顔に定評がありそうな痩せマッチョな体型をしている。

二人とも正対な外見だが、黙つて心を無にしていればそれなりにモテるはずだ。しかしいかんせん性格がアレなのでモテ路線からは外れていた。

「それでもさすがに最後コケた時の衝撃は痛かったかな」

「あれは痛かったな。黒木のやつが両足使つてまで止めに来るとは思わなかった」

「俺なんか膝と肩に青たん出来てるもん」

「そういう意味では俺は無傷だな。そっちの痛みはすぐに引いたし」
「代わりに筋肉痛が残ったと」

「そういうこと」

結果痛み分けということだ。

その時、二人の前に昨日の出来事で不服全開の美少女が現れた。

「よう。そんなムスつとした顔でどうしたんだよ。せつかくの美少女の称号が逃げてくぞ」

「今日も安定の黒タイツだな。そんなに怒るなって。昨日も散々謝ったじゃん」

二人の挨拶が聞こえているのかどうかわからないほど、ムスーッと頬を膨らませて『私は怒っています！』という雰囲気を全開にしている名波。それもまた可愛いのは内緒。

その二人に返事の代わりに自分の左手を見せる。そしてその左手に巻かれていた包帯をクルクルとほどいてみせた。

「うわぁ・・・」

「マジでか・・・」

二人が引いているのも無理はない。

名波の手には包帯が巻かれていた。厚さから見てギプスが入っていないのは一目瞭然で捻挫とか骨折でないことはわかる。

問題はその包帯の中身だった。

名波のキメ細やかで綺麗だった手には大小様々な傷が付いていた。

中には正方形の絆創膏が貼ってある部分もあった。

この傷はもちろん転んだ時にできたもので、からだを庇うために左手を出したところ、傷を左手が全部引き受けてしまった形になった。不幸中の幸いだが、骨折とか大きなケガはなく、ケガらしいケガはこの左手の傷だけだった。

「これどうしてくれるのよ」

真剣に怒っている様子の名波。そんな表情を見せられた二人は互いの顔を見合ってアイコンタクトをとる。

「悪かった。これホントに俺たちの責任だ」

「そうだな。今度からは気をつけるよ」

「わかった。許してあげるわ。・・・なんて言うと思ったら大間違
いよ！」

フン、と鼻で笑い、不敵な笑みを浮かべて二人を見下ろす名波。

「だいたいね、いつも私のことバカにしすぎなのよ！ 今日は今までの分も償ってもらうからね！ 精神的ダメージと肉体的ダメージを負ってるんだから、断ることはできないからね！」

心底嫌そうな顔を浮かべる隆と、この状況から少しでも逃避するために名波の黒タイツを見て精神統一を図っている拓馬。そして今日こそは仕返しの大チャンスとばかりに大きな態度を取っている名波。

「で、何をしたらいいんだ？」

「今日一日、私の言うことを聞くんというのはどう？」

隆の質問に名波が答える。

「一部の人はご褒美と思うかもしれないが、俺は嫌だ」

「ダメダメ。もうお願いは始まつてるのよ？ 断る権利はありませ
ーん」

楽しそうに笑っている名波。いつもの立場と逆転している状況が楽しくない隆。まだ逃避から戻って来ない拓馬。

「お前はいつまで見てるんだ！」
「いでっ！」

名波の右手に頭を叩かれて戻ってくる拓馬。

さてはて、今日一日どんな一日になるのやら。

イタズラの代償（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると発狂します。

筋肉痛の恐怖。

では次回もお楽しみに！

女性幹部の作戦ミッシェンスタート

こうして一日奴隷として名波に従うことになった隆と拓馬。

そんな事態になっているとは露知らず、『黒木名波ファンクラブ』の女性幹部である竹中^{たけなか}有紀^{ゆき}は、例の作戦を実行に移そうとしていた。作戦の概要はこうだ。

ファーストステップ

第一段階

名波が一人のところを狙い、幹部である有紀自らが話しかけに行く。そして名波を有紀の家に招待する。

セカンドステップ

第二段階

うまく家に連れ込むことができたなら自分の性癖を暴露する。そこでショックを受けるであろう名波に有紀が愛の告白。

サードステップ

第三段階

同情心から名波は有紀と交際を始める。
しばらくしないうちに有紀が『あの二人苦手だからあんまり関わりたくない』と名波に告げる。

ファイナルステップ

最終段階

その後名波は有紀のお願いということもあり、二人を避けるようになる。

もともと二人のほうからはあまり近づかないので、名波がからかわれることもない。

そして女同士であるため男が近寄ることもない。さらに名波は笑顔を取り戻し万々歳！

有紀は少し地味な印象を受ける長い黒髪を、うなじ辺りで両側に二

つくくり前に垂らしている。

本体である黒縁のメガネをクイッと持ち上げながら、作戦の概要が書かれた紙を自分の席で読み返して、ニヤニヤとしそうな表情筋を必死で押さえつける有紀。

ファンクラブの会員達も賛同してくれたので、いつもより100倍の勇気を持っていた。

昨日、家に帰ると会長から『やはりあの作戦は危険が大きい』という内容のメールが送られてきたが、今の有紀にはどんな優秀なブレ―キもただの『ひのきのぼう』と化していた。

そのぐらい自信がある作戦だった。

先程の作戦概要を見てもらうとわかる通り、この竹中有紀は友達としてではなく、一人の人間として黒木名波を愛している。

同じクラスになってから色々と裏で手を回し、席替えの度に名波の隣になるように工作をしていた。

そんな努力のおかげもあってか、今ではファンクラブの幹部にまで上り詰めてしまった。愛ゆえの結果であった。

そしてついに名波に自分の想いを伝える『オペレーション・リリイ』（命名・有紀）を遂行することが決まった。

少しドキドキしてはいるものの、作戦が失敗する様が思い浮かばない有紀。

いつもよりも少し早起きして鼻パックもしたし、自分なら必ず成功できる。むしろ他の人に成功して欲しくない。

「よし。朝のホームルーム始めるぞー。席につけー」

そう考えていると、担任の先生がガラガラとドアを開けて入ってきたので、慌てて紙を机の中にしまう。

「有紀ちゃんおはよ」

「お、おはようございます」

笑顔で左隣の席に座る美少女が自分に挨拶してくれた。
今日の作戦の成功率が少し上がった気がした。

そして放課後。

ついに約7時間の沈黙を打ち破って、女性幹部竹中有紀が行動を開始する。

一日の授業が終わると隣の席の名波に声をかける。

「ねえ、名波ちゃん。よかったら今日うちに来ない？」

昨日の夜から自室にある大きな熊の人形を相手に何度も練習していた言葉だ。完璧だった。

「え？ 有紀ちゃんち？ うーん・・・今日はちょっと用事があるんだよねえ・・・」

「用事？」

エマージェンシー！エマージェンシー！

まさかの予定有りに内心戸惑う有紀。

「うん。今日はこのあと木下と相沢に色々と奢ってもらったんだ」

ここでも邪魔をしてくる木下・相沢ペア。

少しくじけそうになりながらも、なんとか心の状態を整え直す。
しかしあの二人と用事があったとは考えもなかったので、言葉が出てこない。嫌な汗が背中を一筋流れた。

「もしかしてあの二人と付き合ってるの？」

「へ？」

やっと声を出したと思ったたら変なことを聞いてしまい、頭の中で後悔する有紀。

その質問に名波はキョトンとしている。

「おい、黒木。人を待たせておいて自分はおしゃべりか」

「うるさいわね。今日は私がメインなんだから私に合わせなさいよ」

教室の後ろから歩いてきた隆が名波に声をかける。その隣に拓馬の姿はない。

「あれ？ 木下は？」

「あいつはトイレに走っていった」

そんな会話を聞きながら有紀は頭の中で作戦の練り直しをしていた。

「行くんならさっさと行くぞ」

「今有紀ちゃんと話してるんだから待っててよ」

「じゃあ竹中も連れていくか？」

まさかの隆からの誘いに、作戦の練り直しをしていた有紀が顔を上げる。

願ったり叶ったりの大チャンスである。これならまだ作戦成功はありえる。

そう考えた有紀は、できるだけ嬉しそうにしないように注意しながら言う。

「・・・私も行っているの？」

「まあ黒木がいいならだけどな」

「あんたと違って心が狭くないのよ。じゃあ有紀ちゃんも行こっか」

笑顔で誘う名波。その顔に一瞬だけ固まる有紀。トイレから戻ってきて一人増えたことに驚きながらも、その相手が黒タイツを履いていたので即座にOKをする拓馬。

そして誰にも気づかれないようにニヤリと口角を上げる隆であった。

女性幹部の作戦ミッシヨンスター（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると前転して喜びます。

ついにやってきた女性幹部の一世一代をかけたこの作戦！
果たして結末はいかに！

そして隆の謎の笑みの理由とは？

というわけで次回もお楽しみに！

女性幹部の作戦く邪魔する者とされる者く

放課後。

名波、有紀、拓馬、隆の四人は学校近く的大型ショッピングストアに来ていた。

ここには食品などが売っているスーパーはもちろん、服屋、小物屋、フードコート、占い屋などありとあらゆる店が揃っていて、夕方のこの時間は学校帰りの高校生や放課後デートを楽しむカップル、夜ごはんの買出しに来た近所のおばちゃん、一人暮らしのサラリーマンなど、様々な年齢性別の人間が集まっている。その建物内に四人も入り込む。

「なあ黒木ー。奢るって言ったけど、あんまり高いのはやめてくれないよ?」

高校生の財力なめんなよ? とばかりに弱気な発言をするのは変態紳士の拓馬。ここに到着するまでに、5回以上は財布の中身を確認している。

「大丈夫よ。おやつになりそうなものを奢ってもらおうと思ってるだけだから、そんなに高いものはねだらないから」

「・・・なんか優しい黒木って気持ち悪いな」

「木下には手加減しないことに決めた」

「すみませんでした!!」

隆が『友達も誘えばいいさ』と言ってくれたことに少し機嫌を良くしたのか、奴隷の拓馬に少しばかり優しくしているのは、左手を包帯で固めた美少女名波。ここに到着するまでに、3回以上は『相沢も少しいいところがあるんだね』と言っている。

そんな名波に道中何回も言われた隆が口を開く。

「拓馬。お前はもう大人しく黒タイツでも見てろ。これ以上奢る金額が増えたらたまらん」

「へーい」

「あの、私も来て良かったんですか？」

そう隆に言うのは、黒髪の女子高生の有紀である。

有紀はなんとなく作戦の延長でここまで付いてきてしまったが、冷静になって考えると、家に誘うのを違う日にずらせばよかっただけのような気がしていた。

それにどこかで例の作戦の紙を無くしてしまったらしく、さっきからカバンをちよくちよく探しているが見つからない。机の中にいたままなのかもしれない。それが有紀の作戦への不安を加速させていた。

しかもここにいと、相沢と木下に借りを作ってしまうような気がして地味に苦痛だった。

そんな有紀の気持ちを知ってか知らずか隆は、問題ないさ、と言う。

「黒木の友達なんだろう？ 別に一緒に来たって変じゃないだろ。それに俺と拓馬は黒木の奴隷なんだ。断って奢る金額が増えても困る。お互い得をしてるんだから気にするな」

小さく微笑む隆。いつもとは少し違う隆の一面を垣間見た気がして一瞬きゅんとしてしまった有紀だが、相沢は敵だと認識し直すことでなんとか平常心をキープする。

名波のほうに向かって隆が問いかける。

「ところで俺たちは何を奢らされるんだ？」

「ちよっと落ち着きなさいよ。たしかあの辺に・・・あった！」

名波の視線の先には、クレープ屋があった。

それが目に入るなり、小さい子のように楽しそうに走っていく名波。健全と走りゆく美しい黒タイツに目を奪われる拓馬。

健全な笑顔で走っていく名波に見とれる有紀。

そんな二人を見ながらポケットの中をこそそそとしている隆。

「みんなー！ 何してんのー？ 早く奢ってよー！」

「はいはい。なんだあいつ。かなりご機嫌じゃないか・・・」

拓馬が少し悔しそうにつぶやく。それを聞いていた隆が拓馬に近寄って何か耳元で囁く。

隆が拓馬のポケットに何かを入れて離れると、拓馬が不思議そうな表情を浮かべる。

このイタズラ男、また何かよからぬことを考えている様子。

「ちょっと！ 早く来てよ！」

「ほら姫様のご立腹だ」

「はいはい。今行きますよーっと」

二人が歩いて名波のところへと向かうのを見て、あとを追うように有紀も名波の元へと向かった。

「んー！ おいひい！」

「姫様。お気に召しましたかな？」

「満足じゃ！」

美味しそうにクレープを頬張る名波。

四人がけのテーブルに座っている。名波の向かいに拓馬、有紀の向かいに隆がそれぞれ座っている。

実際、あれだけのことを毎日毎日させられて、クレープ一つで許されてしまう関係とはどうなのだろうか。

そんなことを考えていると、最終的には『黒木M説』へとたどり着いてしまう拓馬であった。

「あの、私も奢ってもらって良かったですか？」

有紀が申し訳なさそうに、自分の向かいに座る隆に聞く。

有紀自信はクレープを食べる気はなかったのだが、隆がせっかくだからと奢ったのだ。

「細かいことは気にするな。そんなことよりもなんで敬語なんだよ。同じクラスの黒木と友達なんだから俺達にもタメ口で話したっていいと思うぞ？」

「おっ！ 今日の相沢はなんかいつもと違うねえ！ ついに良心が芽生えてきたのかな？」

クレープを食べてご機嫌なお姫様は、いつもと違って良心の塊である隆に感心していた。

その隆の横で拓馬は、先ほど隆がポケットに入れた紙を見ていた。

あの時、隆が拓馬に耳打ちした内容はこうである。

『面白いものを拾った。あとで隙を見て読んでみる』

隆が良心全開で話している今がチャンスと思い読んでみた。

そこに書かれていたのは『オペレーション・リライ』と命名された謎の作戦の概要が書かれたものであり、そこにはなにやら自分たちの名前も書いてあった。

少し驚きながらも軽く内容がわかる程度に目を通した拓馬は、それをポケットに入れ直してから隆を見る。

待ってましたとばかりに視線を合わせてきた隆は、チラリと有紀のほうを見る。

拓馬は、なるほど、と心の中で呟く。

隆と拓馬の付き合いは長いため、隆のチラリだけで全てを理解するには十分だった。

作戦のことなんかすっかり忘れているであろう有紀に襲いかかるイタズラ男の魔の手。

果たしてどうなってしまうのか。

続く。

女性幹部の作戦、邪魔する者とされる者、（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると踊り狂います。

次回はイタズラ男のターンです。

というわけで次回もお楽しみに！

女性幹部の作戦／筒抜けの作戦／

今日最後の授業が終わった時、言われていたとおりに黒木の元へと向かうために腰を上げる隆。

拓馬は我慢していたトイレへと教室を飛び出していったので今は居ない。

隆にとって今日はヒドイ一日だった。

名波が喉が乾いたと言えば自販機まで行かされ、消しゴム忘れたと言えば自分の消しゴムを貸したりと、女王さながらの傲慢っぷりに隆はストレスの塊と化していた。

それに加えて、今はもう落ち着いてきている筋肉痛が拍車をかけるように隆を攻撃していた。

いつか絶対に仕返ししてやる、と内心ではドSの炎を燃やし、必死にヘーこらしていた。

そして残すところ放課後イベントだけになったので、なんとか意識を平常に保って乗り越えようとしていた。

そして黒木のほうに向おうと視線を動かしたとき、拓馬の机の下に一枚の紙が滑り込んできたのが見えた。拓馬が落とした紙かと思いい拾い上げて見ると、拓馬の汚い字とは全然違う女の子らしい文字で書かれていた。

「ん？ 誰のだ？」

拓馬の前の席を見ると誰も居なかった。

帰るの早すぎだろ、と思いながらその前の席を見ると、そいつもいなかった。

残るは更に前、拓馬の3つ前の席、名波の席の通路を挟んだ隣の席の人物のものだと判明（仮）した。

たしか名前は・・・と思い出しながら隆は持っていた紙を見る。

そこには『オペレーション・リライ』と書かれた作戦の概要が記されてあった。

目を通してみると、昨日のストーキング集団の幹部が名波のことを誘惑・・・というよりも告白して成功して～というような内容だった。

「よかつたらうちに来ない？」

そんな時にふと耳にそんなセリフが聞こえてきた。

紙から顔を上げて、声の主を探すと、さっきの名波の横の席の女子であることに気づいた隆は、持っていた紙の内容を思い出す。

そして全てを繋げる。

ここで今日一日の名波へのストレスを晴らすためと、昨日の一連の出来事に対する完全な八つ当たりに向けて、隆は自分のイタズラスイッチを全力でONにした。

普段からイタズラ心を忘れないようにしている隆は、作戦を考えるのに1秒もかからない。8割閃きだ。残りは1割がぬかりなく手を回すことで、もう1割はニヤつかないように表情筋の制御に回す。

『オペレーション・リライ』などと言ってはいるが、イタズラの口である隆から見ると、その作戦は穴だらけだった。

まず第一に家に誘うことから始めなければいけないのがよくわからなかった。

学校の誰も居ないところで言えばいいじゃないか。そう隆は思った。たくさんある作戦の穴を頭の中で挙げながら、自分のプランを考えている。

そして決まった作戦はこうだ。

- 一、家に行かせないようにする。
- 二、一緒に放課後行動をさせる。
- 三、いつもとは少し違う自分を見せて警戒心を解く。

四、黒木とは別々で帰らせる。

五、ファンクラブのメンバーを聞き出す。

こんな感じ。

ざっくりとこの作戦が決まるまで約0・7秒。そして行動に移そうと足を踏み出すまで約1秒。

さすがイタズラのプロは考えるスピードが違いますね。

ここだけ見ると、好きな女の子を取られまいとする男の子のようですが、そこはDＳの隆。あんな美少女で自分のＳ心をくすぐってくるのに、嫌な顔をしながらもめげずに何度も立ち上がってくる逸材を手放したくないと思つての行動です。

もしもあの変な作戦通りに事が進んだら、隆にとってはせっかく手に入れたおもちゃを取り上げられてしまうようなものなのです。

ちなみに作戦の五は実行する気はなかった。聞けたらラッキーぐらいに思つて一応作戦に入れていた。

そして今。

クレープを食べ終わつた段階で、作戦の一―三までは順調にクリアしており、拓馬への手回しも完了している。

いつも以上に気を使う状況だが、達成した時の清々しさを考えるとニヤニヤを抑えている表情筋にも力が入った。

「このあとはどうするんだ？」

「私はもうクレープ奢ってもらっちゃったから満足したし・・・帰る？」

拓馬の質問に名波が答える。

「そうだな。これ以上ここに居て金を使わされても困るしな」

「ヒドイ！ 私ってそんな女に見られてるの？」

「今日の態度を見てたらそう思わずにはいられないだろうが」

「そうだそうだ！」

隆の言葉に拓馬も乗ってくる。

こういうところで黒タイツに惹かれずに、友達を選んで援護してくれるところが拓馬の良いところだと隆は考えている。

「はいはい。じゃあ今日はこれでお開きにしましょうか」

「えーと・・・黒木は俺たちと同じ方向なんだけど、竹中は？」

「あ、私はバスだからこっち・・・かな」

いつもと違う隆に少し緊張してしまった有紀は、すっかり作戦のことを忘れてこの場を楽しんでしまっていた。最初に比べて口数は多くなったものの、それでもまだ慣れていない感があった。

しかしそんな有紀に話しかけた隆は、これで警戒心が解けただろうと思った。

「そっか。じゃあまた明日ね。有紀ちゃん」

「うん、また明日」

バイバイと手を振る四人。

有紀と別れた三人は電車に乗るため駅へと向かって歩いていった。

「今日は二人ともありがとね。クレープとか奢ってもらっちゃったし」

「俺は黒タイツを見るための見学料だと思っていたから問題は無い！」

「木下はどこまで変態なんだ」

「明日からまた地獄が待っているから覚悟しておけよ」
「それは勘弁してください」

穏やかじゃない冗談を隆が言うと、笑いながら頭を下げる名波。
きつとこういう人当たりの良さというかそんな感じのところも、美少女たる所以なのかもしれない。

「それにしても寒いね」

自分のからだを抱きしめながら名波が言う。

季節は11月。

その夕方ともなれば結構寒くなってくる時間帯である。

「そうだなー」

「ねえ！ 二人の上着貸してよ！」

そう言つて無邪気に笑い、二人の真ん中に割り込んで入りそれぞれ
の腕に自分の腕を絡める名波。

普通の男子高校生ならば、名波の可愛さに撃ち落とされているだろ
うが、そこは拓馬と隆である。

「触るな。誰が上着なんか貸すか」

「逆立ちして黒タイツが上にきたら黒タイツに上着を貸してやる。
お前には貸さん」

「ちよっ！痛いし！」

そう言つて互いの距離を詰めて名波を二人の間から押し出す。

「もうイジワルなんだから！」

口ではそういうものの、とても笑顔で二人を風よけにしながら後ろに付いて歩いていく。

三人は今日も仲良しかった。

女性幹部の作戦く筒抜けの作戦く（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

今回で有紀の作戦編が終了です。

次回からはまた日常コメディ（笑）に戻ります。

というわけで次回もお楽しみに！

体育の時間

「くらえ！ バーニングショット！」

「甘いぜ！ グレートマウンテン！」

「ちよっ！ すごい山って！」

今は体育の時間。男子と女子が体育館を半分に仕切って授業中です。男子は体育の先生が風邪を引いてしまったために、自習という名の自由時間となっています。自由時間とはいえども、やる内容は決まっているので『バドミントン』か『卓球』を選択して、時間を潰さなければなりません。

そんな中、拓馬と隆はバドミントンを選択して、ネット越しに打ち合っていました。

普通にやるのでは面白くないという拓馬の意見で、技名をつけながら打つという縛りバドミントんに興じています。

「いえーい。これで5対3な」

「お前の技名のセンスが無さすぎて相手にならねえし」

互いに未経験だが実力だけで言えば隆のほう为上だった。しかし拓馬のネーミングセンスに笑わされっぱなしでまさかの五角。拓馬のほうは笑いもせずに平然と打ち返してくるので、この縛りは隆に圧倒的に不利だった。

「人のセンスにケチつけるなよな」

「つつこまずにはいられねえんだよ。なんだよグレートマウンテンって」

「ほら、風林火山みたいな感じでかつこよくね？」

「意味不明だし。ほら続けるぞ」

「はいよー。ワンダフルサーブ！」

拓馬のアンダーサーブでラリーが始まった。

一方その頃、女子はバスケの試合中でした。今は名波率いるAチームと、有紀が率いるBチームの試合です。

名波が華麗（笑）なドリブルを披露してジャンプシュート。特にバスケ経験があるわけでもなく運動神経が格段いいわけでもないのに、ゴールまで届かずに見事にゴール下を守っていた敵にナイスパス。

「くそっ！ 惜しい！」

それでも一生懸命悔しがる名波に、自由時間すらサボって女子の試合を見ていた男子は、思わずニンマリしています。

その中で地味に活躍していたのが有紀でした。小学校の頃にミニバスをしていたので、部活をやっている人間には劣るけれども、体育の授業レベルならかなりの活躍。

相手チームに名波姫がいるけれども、今輝かずしてどこで輝くのさ！と言わんばかりの性能の違いを発揮してます。

そして華麗にレイアップシュート。見事ゴール。

有紀が男子のほうをチラリと見ると、拓馬の打ったシャトルを爆笑しながらもなんとか返す隆の姿。

思わず昨日の楽しかった時間を思い出して顔がニヤける。

何を隠そう、有紀は隆に好意を持っていたのです。昨日の良心全開の隆の顔が、有紀の知っている隆の顔とあまりに違って優しかったので、ついギャップにやられてしまったのです。ギャップって怖いですね。

「有紀ちゃん？ どうしたのばーっとして・・・大丈夫？」

「え、あ、名波姫・・・じゃなくて名波ちゃん！」

「姫？」

「いや、なんでもない！ 大丈夫！」

そう返事をして、試合に戻る有紀。姫と呼ばれたことに変な感じを覚えながらも、真面目な名波は試合に集中した。

そして爆笑の渦に巻き込まれた二人の男子。

ついに拓馬が隆の笑いにつられるように笑い始めた。

「なんなんだよ！ さ、さっきから変な名前ばかりつけやがってヒイヒイ」

「だから真剣も真剣、超真剣だつて何度も、ヒヒヒッ」

「ヒイヒイ、疲れてきたな。そろそろやめね？」

「だな。腹筋が割れそう」

「もう割れてるくせに」

「何故知っているんだ！」

バカなことを言いながら、男子と女子の境目にあるネットのところまで歩いていき、二人で並んで座る。

ちなみに隆は体育の授業とはいえども、授業中は至って真面目なのでDSを現さない。そして拓馬は、体育の授業だと女子はジャージを履いているので全く興味関心が無い。

したがって、他の動物園の檻にしがみついて女子のほうを見ている男子達とは違い、女子側に背を向けて男子側を向いて座っている。

「いやー、今日の一番は隆の『デリシヤスワンダフル』かな」

「俺はお前が言った『麦茶アタック』が一番ツボった」

互いの健闘を称え合っていると、後ろから近づく人物がいた。もちろん有紀である。え？名波じゃないよ？

「相沢くん」

「え？」

後ろから声をかけられた隆は思わず振り返る。そこには試合を終えた有紀が立っていた。

「竹中か。何かあった？」

「えーっとね、見ててくれた？」

「ん？ 何を？」

モジモジしながら言う有紀に隆は意味がわからないという風に聞いた。

「さっきバスケの試合で大活躍だったんだけど、みててくれたかと思つて・・・」

「あーごめん。見てないや。バドミントンしてた」

「あれ？ そ、そっか。普通そうだよー」

明らかに落ち込む有紀。さっきまでとても輝いていたのに、輝いただけで終わってしまった。

まるで天気が悪いときにやってきた流星群のような気分だった。

そんな残念な気分を引きずったままズルズルと他のBチームの仲間の元へと戻ってきた。

『昨日は優しかったと思つたんだけどなあ・・・』

頭の中でそう呟いてみると、隆への熱が少し冷めた気がした。

そんなことを考えながら、試合中のAチームとCチームの試合を見る。そこで一生懸命に頑張る名波の姿を見て気がついた。

いくらミスしても笑顔を振りまく名波。味方が点数を決めると自分のことのように喜んでくれる名波。そして可愛い顔。少し小柄だけ

ど美人ともとれるような容姿。どこをとっても及第点がなかった。

『やっぱり私には名波姫しかない！ 名波姫が大好きだー！ 結婚してくれー！』

所詮男は男だ。名波相手には勝負にすらならなかったのだ。

名波への想いと気持ちを再確認することができた体育の時間だった。

体育の時間（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

体育の授業の自由時間って微妙に微妙ですね

次回もお楽しみに！

美少女の間違い探し

「さみー」

「この時期の体育の授業の後って気持ち悪いぐらい寒いな」

「だよなー。しかも今日みたいに汗かいちゃうと余計に寒い」

拓馬と隆は、小走りで暖房が点いている教室へと急いでいた。

廊下は暖房が点いていないので外よりはマシだがかなり寒かった。窓の外は猛吹雪です。

いそいそと教室に戻ってきた二人は自分の席に座るなりカバンの中をガサゴソと漁っていた。

「よっしゃ！ これで冬の寒さを凌げるぜ！」

そう言っただけで拓馬が取り出したのはカイロだった。

袋の中に鉄粉や吸水剤、活性炭、バーミキュライトなどが入っていて、それをシャカシャカと振って空気に触れ合わせるによって酸化発熱を起こす際に発生する熱を利用した、皆さんもご存知の小型暖房道具ですね。

拓馬はそれをシャカシャカと振ると顔や手に当てて、ふへー、と声をもらした。

「くそっ！ カイロ切らしてた！」

すごい悔しそうに言う隆。たかがカイロの一つや二つでグチグチ言うのはみっともないですね。

手を擦り合わせてハーッと息をかけて暖まろうとする隆と、カイロで又クヌクヌしている拓馬。

だんだんと教室に他の生徒が戻り始めた頃、名波と有紀が仲良く教

室に戻ってきた。

「あつたかーい」

「私はまだ暑いかも」

有紀、名波の順で入ってくる。さっきまでバスケの試合で華麗なステップ（笑）を披露していた名波は、ブレザーの制服のシャツをつまんでパフパフと涼んでいる。

「うわっ！ 何あんたら、キモイ」

「キモイとはなんだ」

一人は真剣な目で手を擦って、もう一人はのほほんとした目でカイロちゃんと戯れている。

「あ？ お前誰だよ」

手を擦りながらもちゃんと返答した隆に対して、拓馬は名波に聞いた。

ポカンとする名波と有紀。

誰かと聞かれればそれは黒木名波と竹中有紀以外の誰でも無い。

「誰って・・・私？」

自分のことを指さして聞き返す名波。その様子を見て、隆が声をかけた。

「実はな・・・さっきの体育の授業の時、頭を打ってしまったんだ。それでなんともないと思っていたんだが、この様子だと黒木のことを忘れてしまったみたいだな」

「は？ 何言ってるの？」

「冗談だと思ってるのか？ なら本人に聞いてみるか？」

そう言うとき、カイロで又ク又クしている拓馬に、一歩近寄り声をかける。

「拓馬」

「どした？」

「こいつ誰かわかるか？」

「・・・しらん」

「えっ！ ちよつと嘘でしょ！？」

「ちなみにこつちは？」

「竹中だろ。変なこと聞くなよ」

「いやいやいやいや！ なんで私だけわからないのっ？」

拓馬の肩を掴んで前後に振る名波。

その後ろでちよつと深刻そうに見守る有紀。

そして笑いを堪えている隆。

そんな隆の表情を見て、名波が反撃に出る。

「わかった！ またあんた達がグルで私のことからかかってるんですよ！」

そう言い放つと、プンスカと怒って自分の席のほうに歩いていった。また。

残った有紀が隆に聞く。

「木下君、大丈夫なの？」

「うーん・・・全然大丈夫だぞ」

「本当に名波ひ・・・名波ちゃんのことわからないの？」

有紀がすっかり姫と呼びそうになったのに隆が反応して、有紀にバレないように必死に笑いをこらえる。

「わからないってゆーか・・・ヒントは間違い探しだな」

「間違い探し？」

「いつもの黒木と今日の黒木が違うところはどこだ」

クイズの出題者となった隆は、わからないといった顔をする有紀に出題した。

じつと名波を観察する有紀。見れば見るほど可愛い。愛でたくなる。めんこい。

いろいろな気持ちが入かんでくるが、それらを制御しながら思考を巡らせる。

可愛い顔。いつも通り。

微妙に膨らんだ胸元。いつも通り。

少し小柄なからだ。私好み。

スラリとした綺麗な生足。舐めたい。

いくら考えてもわからなかった。というよりも邪念ばかりが浮かんできてそれどころではなかった。

表面上は『わかりませーん』な表情でも、心の中は『ムフフ』な気持ちで一杯な有紀。この女もかなりの変態ですね。

そんな有紀を見ながら心の中で隆は思った。

『そういえばこいつは黒木大好き変態バカだったな。気づかないか』

「どうかしたの？」

並んで立っていた二人に声をかけたのは吉永春樹よしなが はるきだった。その声に振り向いた隆。有紀は依然名波をガン見したままだ。

「・・・誰？」

「あ、僕、吉永です。竹中さんの部活の先輩なんだ」

隆達2年生の一つ上の3年生の春樹は簡単に自己紹介をした。

なんで3年生がこんなところに、と隆が思っていると春樹が答える。

「竹中さんに用があっただけど・・・これってどういう状態なの？」

「こいつが黒木っていうあそこの女子のことを忘れてしまったっていう話をしたとこです」

「ん？ どういうこと？」

簡単に説明する隆。それを聞いて納得した顔をする春樹。

「要は間違い探しなんでしょ？」

「まあそうですね・・・」

今日初めて見たであろう名波の間違い探しをさせたところで、わかるわけがないと思っっている隆。

しかしこの吉永春樹と言う男、ただものではないがそんなことを隆が知る由もなかった。

ここで有紀が背後に誰か立っているのに気づいたらしく振り向く。

そこに立っていた春樹が視界に入ると同時に、さっきまでの邪念が吹き飛んだかのように驚いた表情を浮かべる。

「吉永先輩？ な、なんでこんなところにつ？」

「竹中さん。今日の部活のことで話があったんだけど、今大丈夫だった？」

「だ、大丈夫ですっ」

「じゃあちよっとうこうか」

そう言つて教室を出ていく春樹と有紀。

残された隆はなんとなく拓馬の頭を叩いてから席についた。

美少女の間違い探し（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とかあれば書いていただけると大変喜びます。

ついに彼が日常に出現しました。

もちろん彼が誰だか覚えてますよね？・・・覚えてますよ・・・ね
??

次回もお楽しみに！

変態紳士の判別方法

その日の放課後。

授業が終わるなり、カバンも持たずに名波が拓馬の席の前に立った。

「ねえ木下。本当に私のことわからないの？」

「おお黒木。わからないって何が？」

「いや何がつて・・・ほら、私のこと知らないって言うてたじゃん」
「そんなこと言ったか？」

「だって今だつて・・・」

ふとおかしなことに気づく名波。目の前の拓馬は頭にハテナを浮かべている。

「あ、あれ？なんであんた私と話してるのよ」

「なんでつて・・・お前が話しかけてきたからだろうが」

「もう・・・なんなのよ！」

「いてえな！　なんで叩くんだよ！」

いきなり拓馬の頭をべしつと叩く名波。

それもそのはず。体育の授業のあとはあんな状態だったのに、今は何事も無かったかのように自分と話してはいないか。

そのことが気になって、授業も上の空で拓馬のことを考えていた。
『もしかしたら本当に記憶が？』とか『もしかしたらまた相沢の仕業？』とかいろいろ考えていた自分がバカみたいに思えてきた。

「相沢！　どういうことなのよ！」

そして怒りの矛先は隆に向かった。やれやれといった様子で答える

隆。

「どうしたもこうしたも、こいつは根っからの変態だぞ?」

「そんなこと周知の事実じゃない」

「おい黒木! それは言い過ぎじゃないかつ?」

「そうかもしれない。ところでお前が拓馬と初めて話したのはいつごろだった?」

「えーと・・・確か9月の終わりぐらいかな?」

拓馬と隆が名波と今ののような関係になったのは夏も終わり、肌寒くなり始めた9月の終わりぐらいだった。

変態爆発の時期を迎えた拓馬が浮かれ始める時期だった。

そんな拓馬を見て、隆は秋の始まりを感じた。そんな時、教室に入って拓馬の変態リーダーが一人の女子生徒の足を捉えた。

拓馬は全然女子の名前を覚えてなかったの、その時はまだ名波の名前を知らなかった。

それから少ししてから名波の名前を知ることにはなるのだが、それまでは『素晴らしき黒タイツの人』と覚えていた。

つまり何が言いたいのかというと、拓馬は変態である。そして黒タイツ中心で回っていたので、黒タイツが無い名波などただの人ではないのだ。

先ほどまで体育の授業で暑かったために黒タイツを履いていなかった名波のことを、拓馬は『名波』と判別できなかったのである。とんだ変態だ。

「・・・というわけで、黒タイツを履いてないお前が悪い」

「ええ〜! それって私が悪いの?」

「まあ原因はお前にあるんだからお前のせいだろ」

どうも納得がいけない名波。とりあえず隣に座っている拓馬の頭をベシッともう一回叩いておく。

「なんだよ！　なんでそんなに皆してポカポカ叩くかな！　これ以上おかしくなったらどうするんだよ！」

「あ、自覚はあったのね」

「落ち着け。叩いて直してるんだ。感謝しろ」

好き放題に言う二人に納得がいけない様子の拓馬。
そんな拓馬を見て名波がつぶやく。

「もしかして私って春になったら忘れられちゃうの？」

「ずっと履いてればいいじゃん。俺はそっちのほうがいいと思うよ」

「誰があんたの性癖のために履くもんですか。それにこれって地味にあつたかいんだからね。冬ならともかく春に履いてたら足が蒸れて仕方ないわよ」

「そこは我慢しろよ」

「あんたが我慢しなさい」

また頭を叩く名波。ポコスカと頭を叩いている名波だが、実は本当に忘れられたのかと思ってちよつと寂しかったのだ。

でもこうやって覚えていてくれたことが嬉しいわけであって、この『叩く』という行為は照れ隠しの行為なのだ。可愛いやつめ。

「こうして黒木は拓馬のために春でも夏でも季節を問わずに黒タイツを履き続けるのであった」

「何勝手にナレーションしてるのよ」

さりげなくナレーションを入れる隆にちゃんとつつこむ名波。

「で、実際どうするんだ？」

「これ履いてないと気づいてもらえないって、地味に怖いわね」
「確かに恐怖を感じるよな」

拓馬の変態っぷりに恐怖を抱く隆と名波。おそろべし変態。

「まあなんとかなるんじゃないか？」

「・・・ホントにそう思ってるの？」

「少なくとも俺は覚えててやるよ」

「相沢・・・」

少し意外な言葉にキュンとする名波。

「『拓馬につきまとう変な美少女』って感じでいいか？」

「変な覚え方はやめてもらえないでしょうか？」

その頃異様に静かだった拓馬は何をしているのかというと、二人の会話を聞きながら、カイロをハサミで開封していた。

よいこはマネしちゃダメだぞ！

変態紳士の判別方法（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

前のほうをいろいろと手直ししました。
内容は変わってませんのでご安心を

次回もお楽しみに！

それぞれの兄弟姉妹

「そういえば兄弟とかっているの？」

拓馬、名波、隆は仲良く3人で帰っていた。ちなみに今日は後ろには誰もいません。

拓馬に忘れられたことがちょっと寂しかった名波は、その気持ちを誤魔化すために一緒に帰ってます。

なんて健気な女の子。なんやかんやで二人のことが好きな名波ちゃんでした。

その名波が会話の中で二人に質問した。

「俺は姉ちゃんと弟が一人ずついるぞ」

そう答えたのは黒タイツ拓馬。

珍しく名波の黒タイツではなく、前の女子生徒の黒タイツを見ながら答えた。

『あの足はちよつとまいちだな。〇脚すぎる』とか考えてます。

「へーそうなんだ。いくつぐらい離れてるの？」

「えーと・・・たしか3つずつ離れてるんだっけな？」

「2つずつだ。自分の家族構成ぐらい覚えとけ」

そう拓馬の発言を訂正したのはDS隆。

今日の隆は比較的穏やかな心境。名波に適当な嘘をついて困らせたあげく、放課後に拓馬のところに行った時の名波の泣きそうな顔は格別だった。

そんなこんなで満足できた隆は、今日の帰り道ぐらいはいじめるのをやめてやろうと思えるぐらい良心的な精神状態だった。

「あれ？ 2つだったか。時が流れるのは早いなあ」

「時が流れても年の差は変わらねえよ」

「じゃあ相沢は？ 兄弟とかいるの？」

「俺は双子の妹と弟がいる」

「双子か！ 顔とか似てるの？」

双子と聞いてちょっとテンションが上がった名波。

「多分見分けつかないぞ。男と女だから見分けられるかと思ってたら大間違いだ。あいつら自分たちが似てるの知ってて、わざと同じような格好して家族のこと騙しに来やがる」

「俺も何回も見てるけど、全然見分けられないもん」

「あれ？ お前まだ見分けられなかったのかよ」

「隆のとこの家族がおかしいんだって！ あの二人の見分け方教えるよ！」

「何回も言ってるじゃんか。肌が弱い方が希のぞみで目が少し小さいほうが望のぞむだって」

「もうそんなので見分けられるわけ無いじゃん！」

ついに茶色の頭を掻き毟る拓馬。

「そんなに見分けられないの？」

「多分お前じゃ無理だな」

「まだ見てないのにその発言は酷いのではないかい？」

「・・・なんでそんなに自信満々なんだよ」

何故か自信たっぷりの名波。そんな名波を少し気持ち悪いものを見る拓馬と隆。

そして重大発表をするかのように気合を入れて胸を張る名波。

「実は私の家にも双子がいるのです！」

「へー」

「マジで！ そんなに双子ってポンポン生まれていいもんなのか！？」

あんまり驚かない隆と、双子祭りで少子化問題が続いているのが不思議でたまらないという表情をしている拓馬。

「なんか俺だけ仲間外れにされた気分ー」

「いいじゃん。私もお姉ちゃん欲しかったなー」

「姉ちゃんなんていいもんじゃないぞ？ だらしないわ部屋汚いわでいいとこなんてないぞ？」

「でもお前の姉ちゃん可愛いじゃん」

「本人の前で言ってやってくれ。皆そうやって言うけど、家族だと全然わからんちんだよ」

「へー。木下のお姉さんって可愛んだ！ 弟は？」

その質問に顔を見合わせる拓馬と隆。

不思議そうに二人の顔を交互に見る名波。

「俊哉は・・・なあ？」

「そうだな。あいつには会わない方が身のためだぞ？」

「えっ？ そんなに問題児なの？」

「問題児っていうか・・・確かに問題児かもな」

「とりあえず黒木は会わない方がいいと思う」

「ふーん。そっか」

頑なに弟のことを否定する二人。そこで食いつくのがいつもの名波だが、珍しく二人が心配してくれてるみたいなので、今日は大人しく

引いた。

話題を変えようと隆が口を開く。

「黒木のとこの双子は似てるのか？」

「うち？　うちは・・・似てるのかなあ？　自分の家族だから似てるとかよくわかんないけど、見分けられる程度には似てるかな」

「女の子同士？」

「うん。二人ともとっても可愛いよ。目に入れても痛くないもん」

「目に人が入ったら大問題だな」

「昨日もお姉ちゃんお姉ちゃんって走りよってきて、80点のテストの紙を見せてくれたの！　はぁ可愛すぎる！」

隆のツツコミを無視して、自分の顔を両手で押さえてからだをクネクネと動かす名波。

だんだんと姉バカが垣間見え始めてきた。

この美少女名波は、双子の妹を溺愛する姉バカだった。その妹達も妹達で姉が大好きなので相思相愛という仲良しっぷりであった。

「なあ隆？　黒木ってこんなキャラだったか？」

「いや、俺の知ってる黒木はこんなじゃなかったはずだ」

「じゃあここに居る黒木は俺たちの知ってる黒木ではないということか」

「じゃあ本物の黒木はどこに？」

「「おい！　黒木ー！　どこ行ったー！」」

そう叫びながら走っていく拓馬と隆。

「えっ？　ちよつと？　黒木って私でしょ？　どこ行くの？　黒木名波はここですよー！」

慌てて二人を追いかけていく名波。

今日も世界は平和だった。

それぞれの兄弟姉妹（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とかあれば書いていただけると大変嬉しいです。

次回は閑話代わりというわけではないんですが、拓馬、隆、名波の
3人の兄弟の話にしたいと思っています。

では次回もお楽しみに！

黒木家

「ただいまー」

「おかえりー!」

紺の壁の一軒家。

いつものように名波が家に帰ると、双子の妹の桜と遙さくら はるかが走ってきた。名波に飛びつく双子をお姉ちゃんパワーを発揮して両腕で受け止めると、双子の同時頬ずりを両頬に受ける。

「いやーん! 超力ワイイ!」

「お姉ちゃんも超力ワイイ!」

これが黒木家の『おかえりなさい』である。他の家庭はどうなのか知らないが、名波にとってこれが普通だった。

しかし名波は気づいているのかどうかかわからないが、桜と遙は中学生である。その双子が飛びついて来るのを毎度毎度受け止めている名波はどんな腕力をしているのだろうか。それとも双子が手加減しているのか。それは本人たちしかわからないことである。

「今日はなんかいいことあったの?」

名波の顔から自分の顔を離して、遙よりもっさり者の桜が名波に聞く。桜は勉強から家事まで教えたことならなんでもできる万能少女だ。

「今日はねえ・・・これはご飯の時に話そうかなー」

「そんなにいいことだったんだねー」

「まあね」

「遙もいいことあったんだよねー！」

「え、う、うん」

「遙もいいことあったのか！ なになに、聞かせて？」

そう言われた遙は少し照れながら言う。桜に比べて照れ屋な遙。しかし遙はスポーツ万能で球技から陸上競技までなんでもできる運動系女子だ。

「あのね、今日の体育の授業で先生に鉄棒やつてみるって言われたから一番大きい鉄棒で大車輪したら、すごい褒めてもらえたの！」

話しながらだんだんと笑顔になっていく遙を見ると、どれだけ嬉しかったのかわかる。

「おおー！ 大車輪って何かよくわかんないけど嬉しそうだからお姉ちゃんも嬉しいっ！」

そう言っただけで双子に抱きつく名波。遙は抱きつかれながらも大車輪の説明をしている。その説明を聞きながら双子の体温を感じる名波。

名波の愛する双子は、名波が4歳の時に生まれた。

ちょうど名波が幼稚園に上がった時の春に生まれた双子だ。

両親から大切に育てられた名波は、双子が生まれる前から両親に『名波の妹が一気に二人増えるんだぞ？』と言われていた。

その頃から真面目で頑張り屋さんだった名波は、『二人の妹達のためにも一杯私が面倒見なくちゃいけないんだね！』と言うようなことを両親に言っていたらしい。（両親談）

双子が生まれてからも、母親の手伝いをしたり、ご飯を食べさせたりもしていた。

しかしある日、双子の世話を父親としてみると、桜の口から『パパ』

という単語が飛び出した。これが桜の第一声だったのだ。

父親は泣いて喜ぶ始末。その時一緒に聞いていた名波は『どうしてこんなにお世話しているのに、自分の名前ではないのか？』とベーベー泣き出す始末。

その後遙も同じ日にしゃべるのだが、桜と同じく『パパ』が第一声となった。

のちのち、母親が名波の怒りを鎮めるために調べてわかったことだが、赤ちゃんは最初に話す言葉と言うのは『パパ』が一番多いらしい。

赤ちゃんにとって『パパ』という破裂音の連続はとても発音（この場合は発声？）しやすいために、『パパ』が第一声となるのは珍しいそうさ。

口をパクパクさせながら話そうとしてしまい、まだ発音に慣れていない赤ちゃんが声を出そうとすると『パパ』と発音してしまうらしい。

『だから名波って言いたかったのにパパって言っちゃっただけかもしれないわよ？』と母親が言った言葉が決め手となって、名波の怒りは鎮まった。

なので全国のお父さん。残念でした。

こんなこともあって、双子への愛の供給を今まで怠ることをしなかったので、名波は双子の妹達が大好きなままだし、双子も名波の愛を存分に受けながら育ち、名波のことを大好きな妹達として今に至っている。

まさに自他共に認める仲良し姉妹と言えるであろう。

「でね、それから放課後になってそいつのところに言ったんだけど、ケロツとしてるの。でも忘れられてなくて良かったなあ」

「名波にも仲良しの子ができて、お母さん良かったわ」

「仲良しって言えるのかよくわかんないけどね」

「そうだよ。それじゃお姉ちゃんがいじめられてるようにしか見えないじゃん」

そう口を開いたのは桜だ。きつと同じ歳で同じ高校にいたら、例のファンクラブに入っていたことは間違いないだろう。

「でもそれがお姉ちゃんとあの二人との関係だからねー」

「お姉ちゃんはそれでいいの？」

今度は遙が口を開いた。遙はすっかり者の桜とは違い、照れ屋だが冷静に物事を見ていけると言える。

「私はそれが心地良いからいいんだよ。遙も桜も大人になればわかるようになると思うよ」

「あらあら、大人だなんて。私からしてみればまだまだ名波も子どもよ」

双子はあまり納得できていない表情を浮かべていたが、名波は美味しそうにご飯を食べていた。

その顔を見て双子は、早く大人になってお姉ちゃんの考えていることがわかるようになっていたいと思った。

黒木家（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると踊り狂います。

黒木家はみんな仲良し！

次回もお楽しみに！

木下家

「ただいまー」

自宅のマンションのドアを開けて家の中へと入る。

拓馬が家に帰るとまず最初にやることは、皿洗いだった。

母親だけの片親のためにはと思い、まだ収入の無い拓馬は家のことを色々となしている。

皿洗いもその一つだ。別に母親からやれと言われたわけでもなく、自ら進んでやっているのである。

隆が変態な拓馬とつるんでいるのは、こういう母親想いな一面を知っているからなのかもしれない。

皿洗いが終わると自分の部屋に行ってカバンを置く。

そしてリビングへと戻ってきてテレビで再放送のドラマを見る。

「ただいま。あ、拓馬。帰ってたの」

「おう。おかえり。今日バイトは？」

「んー？今日は休みだからまっすぐ帰ってきた」

拓馬の姉の芳恵よしえが帰ってきた。大学生の芳恵は居酒屋でバイトをしている。

給料の一部を家に入れているらしい。表面上は良く出来た姉だが、家ではぐーたらしていてだらしない姉と化してしる。部屋は汚いわ下着のままうろつくわ髪はボサボサだわで、外面以外はダメな人間だと拓馬は思っている。

「なんか飲む？」

「んー。酒」

「ねえよ。麦茶かコーヒー牛乳か水」

「じゃあコーヒー牛乳」

そう言つて芳恵は洗面所に向かい、着ていた服を脱いで楽な格好、もとい下着姿になりソファアに座る。冷蔵庫からコーヒー牛乳を出している変態で有名な拓馬だが、実の姉に興奮するほど変態ではない。そーゆー設定のやつとかもあるけど、実際に姉がいる拓馬としては吐き気がするほどありえない。

「そういえばあんたまだ彼女できないの？」
「できてないよ」

コップに入れたコーヒー牛乳をキャミとパンツだけになった姉に渡す。

芳恵は拓馬の恋愛事情についてやたらと細かく聞いてくる。他の家の姉を知らない拓馬は、全国の姉はこーゆーもんだと思っている。

「そーゆー姉ちゃんはどうなんだよ。彼氏とうまくいつてんのかよ」
「あー・・・もう別れた」

「はあ？ 彼氏できたーって騒いでたのちよつと前じゃん！」

「いや、その、なんていうの？ 方向性の違いってやつ？」

「どこのバンドマンだよ。ホント長続きしねえよな」

芳恵の恋愛は長続きしないことは木下家では有名なことだった。最短で付き合つたその日に別れたというのがあった。

「どうせあれだろ？ いつもみたいにならなさ過ぎとか言つてフラれたんだろ？」

「なんでわかつた？」

「いつもそればっかじゃん。直す気はないのかよ」

「ありのままの私を受け止めてくれる人が現れるのを待っているの

よ！」

芳恵は舞台劇調で言うと、コーヒ―牛乳を一口飲んだ。そんな芳恵に拓馬は呆れてものも言えない。

「・・・ただいま」

「ん」

「おかえり。俊哉もなんか飲むか？」

静かに帰ってきた拓馬の弟の俊哉^{としゃ}は、拓馬の質問に首を振ると自分の部屋に入っていた。

芳恵と目を合わせた拓馬は肩をすくめる。

中学3年の俊哉はいわゆるアイドルオタクである。

テレビで見かけたアイドルに惚れて以来、いろんなアイドルをチェックしては応援している。

さらに最近は自分の周りで可愛い子もチェックリストに入っているらしく、ちょっとした気持ち悪い変態になっている。というよりも変態に気持ちいい気持ち悪いもないと思う。気持ち悪いから変態という名で呼ばれるのだ。

拓馬と隆が名波を俊哉に会わせたくなかったのはこのせいだった。確実にそこらへんのアイドル並みに可愛い名波を俊哉が発見したらどうなることやら。

「俊哉ってまだ追っかけてるの？」

「みたいだよ。いつまで続くんだろね」

「ってゆーか受験じゃないの？」

「なんか俊哉の好きなアイドルが在学してた高校が学区内にあるからってそこ狙ってるらしいわ」

「うわー。ないわー」

心底嫌そうな顔をする芳恵。拓馬は少し俊哉のことが心配にはなっているものの、自分ではどうしようもないので、なるべく口を出さないようにしている。

一方、部屋に向かった俊哉。

「はあ。姉ちゃんも兄ちゃんもうるさいんだよなあ。ここまで聞こえるっつーの」

そう言っつてパソコンの電源を入れていつものアイドルの動画やらを見ながら受験勉強を始める。

一応アイドルオタクと呼ばれている俊哉だが、受験勉強とかはちゃんとしていた。

「あと少しでユリちゃんと同じ高校に入れるんだから勉強しないわけないじゃんっての」

ユリは、俊哉が応援しているアイドルグループの一人である。

俊哉がユリのことを知ったのは、去年の秋頃にやっていたTV番組で出ていたときだった。

まだデビューしたての高校生ユニットという形で紹介されていた。そのグループのなかで飛び抜けて可愛い子がいた。それがユリだった。

ユリに心を持っていかれた俊哉は、パソコンで情報をかき集めて、出演するTV番組は全てチェックした。そんな生活が3ヶ月くらい続いていた。その頃には俊哉は『アイドルオタク』と呼ばれるようになっていたが、本人は全然気にしていなかった。そんなことを気にするぐらいなら、ユリのことを気にしているほうが自分のためになっっているような気がしていた。

最近はテレビに出ているアイドルとユリを比べる時のように、自分の周りの女子にも点数を付けてユリと比べるまでの変態となっ

まいった俊哉。

隆からは『ほとほとにしろよ』と言われているので、ちょっと後ろめたくもあるが、『これが俺の生き方だ！』と思うようにすると、何も気にならなくなってきた。

新の変態の境地に足を踏み入れた瞬間だった。

「よし。今日も勉強頑張るかな。ユリちゃん、応援しててね」

そう画面に映るユリに話しかける。

そんなこんなで俊哉はユリの未来と自分の未来のために、画面の向こう側にいるユリを見ながら受験勉強に励むのであった。

木下家（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると踊り狂います。

次回は隆くんのお家です。

次回もお楽しみに！

相沢家

「ただいまー」

そこらへんにあるような一軒家。

いつものように鍵を開けて帰宅する隆。どうやら隆が一番乗りで帰宅したらしく家の中からは物音がしなかった。

リビングのソファーにカバンを投げて、冷えきっている室内を暖めるためにストーブを点火。その足で冷蔵庫から麦茶を出してコップに注いで一息つく。

隆の両親は共働きのため、この時間に帰ってくることはあまりない。夕食までには母親は帰ってくるが、最後に父親と食卓を共にしたのはいっただったやら？

別に仲が悪いとかそーゆーわけではなく、時間が合わないのでもーゆー生活に慣れてきてしまっているだけだ。現に母親と父親は休みが合うと、デートと称して子どもをほったらかして出かけてしまう。隆と双子の二人もそれを分かっているの、あまり気にしていない。むしろその時間で好き勝手にしているので、お互い様だと思っている。

「あれ？ 鍵空いてる。ただいまー」

テレビでも見ようかと思っていたら、玄関から声が聞こえた。この声は弟の望だ。

そう思った隆は麦茶を手に、玄関へと向かった。

「よう。おかえり」

「あ、タカ兄にいか。ただいま」

小学生5年生の双子の片割れの望は隆のことを『タカ兄』と呼ぶ。

物心ついたときからそうやって呼ばれていた。

望に聞いたところ、『普通に兄ちゃんって呼ぶの恥ずかしいじゃん。タカ兄だとそんなに恥ずかしくないから』とのこと。

隆には全然理解できなかったが、そーゆー年頃なのだろうと思うことにしていた。

逆に今になって『お兄ちゃん』なんて呼ばれたら、気持ち悪さで病気がと疑ってしまうだろう。

「今日は希は一緒じゃないのか？」

「希ちゃんは今掃除当番だから少し遅くなるってさ」

この双子は互いのことを『希ちゃん』『望くん』と呼び合っている。全く双子というのはよくわかりません。きつとお互いのことはシンクロしているかのようにわかるんでしょうけどね。

その時、ふと隆は気づいた。

「・・・そういえば望に言われてたエロ本あったろ？ あれいつもこのこに入れておいたからな」

「ちよつとタカ兄！ また望くんに変なこと・・・はっ！」

「まーた入れ替わってんのか」

はあ、とため息をつく隆。

何を隠そうこの双子、隆と同じでイタズラ好きなのだ。

顔が似てることをいいことに、しょっちゅう互いの服を変えて隆のことを騙そうと企んでいる。

結局毎回見破られてしまうのだが、懲りずに何度もチャレンジしている。この双子は自分たちのことを見分けられる隆が好きなのだ。

隆もそんな双子のことを嫌いではないので、この入れ替わりのイタズラに付き合っている。

前に両親に試しに入れ替わりを試してみたところ、一発でバレた上に、

父親による撮影会まで始まってしまった。『どうして希が望の服着てるの?』って感じで騙すとかそーゆー問題ではなかった。

ちなみにこの子ども達の父親だけあって、父親が撮影会で撮った写真は額縁に入れてリビングの壁に飾ってある。親バカなんだかどうなんだか。

「で、望はどうしたんだ?」

「望くんのほうが掃除。ねえ、どうしてタカ兄は簡単に見分けられちゃうの?」

「そりゃ家族だからな」

「お父さんとお母さんもそうやって言うんだもん。何か理由があるから見分けられるんでしょ?」

「うーん。父さんと母さんはどうかわからんけど、俺は希が『肌の弱い方』。望が『目が少し小さい方』って感じかな」

「あたしって肌弱いのか?」

「いや、望に比べたらってことだからな。望の肌が強すぎんのかもしれないけど」

望の格好をした希が顎に手を当てて考え事をしながらリビングへと向かっていく。その後について隆もリビングへと入り、ソファーに腰を下ろす。

希が隆と同じように、冷蔵庫から麦茶を出してコップに注ぎ、隆の横にドカッと座る。

「あーあ! なんか入れ替わりするのも飽きてきたなあー!」

「飽きてきたって家族にしかやってないんだから仕方ないだろ」

「タカ兄ーなんか面白そうなこと無い?」

「お前は悩める若者かよ。望にエロ本見せるっていうのはどうだ?」

「だから! 私の望くんに変なこと教えないでよ!」

ソファーに座りながら隆と希が喋っていると玄関が開く音がして、
ただいまーと声がした。

「ん？ 望くんかな？」

そう言うなり希が素早く立ち上がり玄関へと走っていく。

玄関には希の格好をした望が立ったまま靴を脱いでいる最中だった。
その望へと希が飛びつく。華麗に希を抱きしめるようにキヤツチする望。

「またバレたの？」

「タカ兄には全然通用しなかった」

「そっか。じゃあ仕方ないね」

「うん。おかえり望くん」

「ただいま。希ちゃん」

そう言うて軽くキスをする双子。

まるで恋人同士な二人。隆と双子がこのことについて話したことがあった。

『お前らはデキてるのか？』

『デキてるって何が？』

『その、なんだ、付き合ってるのかってことだ』

『僕ら付き合ってるの？』

『よくわかんないけど、望くんのことは好きだよ』

『僕も希ちゃんのことは好きだよ』

『双子なんだから好きでもおかしくないと思います！』

『僕も希ちゃんと同じです！』

リビングから出てきた隆が、廊下の壁に寄りかかりながら双子を見

ている。

そして麦茶を一口飲んで一言。

「俺からしてみればそれが一番のイタズラだと思うんだけどな」

もはや本当に好き合っているのか、それともただの演技なのかわからない二人に、疑問しか浮かばない隆であった。

相沢家（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

さて、次回からはまた日常コメディ（笑）に戻ります。

次回もお楽しみに！

吹雪の帰り道

「うー……寒いよ……」

「寒いって言うから寒いんだ。暖かいと言えば暖かくなるぞ」

「そんな馬鹿な。寒いもんは寒いよ？」

「馬鹿なのはお前の方だ。嘘だと思っなら10回言ってみろ」

「やってやろうじゃないの！ 暖かい暖かい暖かいたたたかいたたたか暖かいあたたかいあたたかいあかたかい……」

「普通に10回言えるように頑張れよ」

隆が名波をからかいながら帰り道をのんびりと歩いていた。正確には吹雪のために早く帰ることができなかった。

大雪だけなら少し歩きにくい道だけが難点なのだが、これに風が加わるととても厄介だった。人はこれを吹雪と呼んだ。

吹雪は風と大雪のコンビネーションで襲いかかってくる。吹雪を経験したことがない人はわからないかもしれないが、吹雪の恐ろしさは大雪でもなく風でもなく顔面の冷たさである。顔を背けるぐらい冷たい風。その時に入り込んでくる雪。

単体ならば問題はないのだが、二つが合わさることによって『前が向けない』という状態になるのである。

そんな状況に陥っている隆と名波。北国の人間なら冬に一度はやる後ろ向き歩きでこの状況を凌いでいた。

後ろ向きなので前は見えないが、歩きなれた道なので前を見なくても後ろ向きの風景だけで歩けるのだ。

「ん？ 黒木。お前のカバンのチャック開いてないか？」

「えっ？ 嘘？」

吹雪の日にカバンが開いていると、そこから雪が入ってきて、教科

書類が大変なことになる。それは阻止せねばと慌ててカバンを確認する名波。

いつもとは逆にお腹側に抱えるように持っているリュックのチャックを確認しようと顔を傾けた。

その瞬間、ものすごい突風が襲いかかった。

その風圧でかぶっていたフードがめくれてしまい、可愛い顔と黒い頭があらわになる。

「冷たい冷たい冷たい！ イテテテッ！！」

頭皮に冷たい雪風が当たり、凍えるような寒さを文字通り肌で味わう名波。その横で後ろを向いたまま姿勢を崩さずに、ケラケラと笑う隆。

「カバンのチャック開いてないし！ しかも寒いし！」

「そうだったか。スマンな」

「相変わらず嘘つくのがお上手なことだ！」

「褒め言葉として受け取っておきますよ。姫様」

どうしてこの二人で歩いているのかというと、拓馬が先生に呼び出しをくらったのである。

なんでも提出したノートに、やたらとリアルすぎる黒タイツの絵を描いてて、それを消さずに提出してしまったのを先生に見えられてしまい、放課後の職員室によびだされたのである。

いつになるかわからないということもあって、先に帰ろうとしたところ、名波が『一人って寂しいでしょ？ こんな吹雪だし一緒に帰ってあげようか？』と誘ってくれたので、隆は丁重にバツサリと『雪に埋もれている』と返事を返したところ、いつものように地味に負けず嫌い精神を発揮して『いいもん！ そこまで言うなら勝手に歩いて行ってやる！』ということになり今に至るというわけだ。

隆は名波のことが嫌いな訳ではない。しかしそれは学校の中での話で、学校の外となると話は別だ。

こうやっていじっている時はまだ話すことがあるのだが、どうも二人きりになると何を話したらいいのかわからなくなってしまう。別に緊張しているからというわけではなく、ただ単に話すネタがないのだ。

一方名波は、明るい性格・・・無邪気・・・純粋な性格。これですね。純粋な性格なので、隆と帰ることにはなんの抵抗もなかった。むしろ学校の中でもあんなに仲良くしてくれるのだから、学校の外でも仲良くしてくれると思っている。そんなところで名波は隆と一緒に帰っても苦痛とも面倒ともなんとも思わなかった。

「またそうやってイジワルばかりして。将来根っからのクソジジイになっちゃうよ?」

「お前だからイジメるんだよ。他のやつになんてやらないさ」

「ちょ、ちょっと、どういう意味ですか?」

「何勘違いしてるんだ? お前ならMだからいじってもいじっても不死鳥の様に何度でも蘇ってくるけど、他のやつは自分が何回も何回もいじられてるってわかったら、あんまり近づいてこないもん」
「私はMじゃないから」

左手を前（後ろ向きに歩いているので後ろ?）に突き出す名波。

「・・・Mじゃないのか?」

「もちろんです」

「じゃあなんで俺たちにいじめられに来るんだ?」

とても疑問に思っていたことを隆は聞いた。

拓馬と二人で構想していた『黒木M説』が違うのであれば、なんで自分たちと一緒にいるのかわからない隆だった。

「なんでって言われても・・・」

しかし名波からしてみれば、『仲良くしてる』と『仲良くしてる』拓馬と隆』という連立方程式が成り立っているため、答えにくかった。

自分は『友達』だと思っていたのに相手はなんとも思っていなかった。こういう状況である。

「私たちって・・・友達じゃないの？」

「友達ってどこからが友達なんだ？」

「えー・・・そこから聞いちゃうの？」

名波は心の中で落胆していた。

「互いが友達だと認めていたなら友達だよ」

「そんなもんなのか？」

「そーゆーもんなの！」

「まあ確かにお前をいじるのは楽しいから友達でもいいか」

そんな隆の言葉を聞きながら、一瞬だけ名波は心の中で、照れ隠しか？、とも思っていた。が、隆に限って照れなんて感じるわけがないと思い直し、表面上は変わらなくても少しだけ今までの関係から後退したような気がした名波だった。

実はその時の隆が『友達』というフレーズに照れていたのは、隆しか知らないものであった。

吹雪の帰り道（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変喜びます。

隆くんの隠れたデレです。

次回もお楽しみに！

嬉しさ余ってイタズラ100倍

『相沢隆は、同じクラスの黒木名波と友達になった』

言葉だけ並べると対して変ではないが、少し正確に書くと不思議な文章になる。

『相沢隆は、ここ最近仲良く過ごしていた同じクラスの黒木名波とやっとな友達同士になった』

全く意味が分からない。

そんなことを考えながら自分の部屋のベッドで隆はゴロゴロしていた。

なんやかんや言っても、DSだとかイタズラ好きとか色々ある以前に、隆も花の高校生なのだ。

友達ができて嬉しくないはずがない。思わずニヤニヤしている隆を見ているとそれがよくわかる。・・・少しキモイ。

隆はこの嬉しさを誰かにぶつけたかった。もちろんイタズラという形で。

その作戦のこと色々と考えていた。何を考えているかはお楽しみとして、そのイタズラが決行されるのは次の日だった。

「おはよー！」

「おう」

「今日も良い黒タイツだ！」

元気に二人に挨拶をした名波。いつもよりも1割減でめんどくさそうに挨拶をした隆と、名波の黒タイツに挨拶をした拓馬。

「いきなり下から見るのはやめてもらえませんか？」

「だって黒木の足ってなんかこう、スラーっとして無駄な筋肉がついてなくて黒タイツが良く映える足って感じなんだもん」

「なんだもんじゃないよ。顔見て。か・お！」

「顔はそんなに興味ないや」

「うわー。ヒドイ」

すごく残念そうに名波は自分の席へと歩いていった。学校中の生徒が『可愛い』と言う、美少女の名波の顔に興味がないのはこの二人だけかもしれない。

しばらくして先生がやってきて、朝のホームルームが始まった。このあと、謎のテロ事件が起こることはまだ誰も知らなかった。

今週2回目の体育の授業。

今日は担当の先生がいるので、男子もバスケの試合をした。体育の授業が終わって教室に戻ると若干の違和感があった。

生徒達は皆、カバンを机の横に掛けるか、椅子の背もたれにリュックを背負わせるかのどちらかのパターンが多かった。

まあ見ればわかるのだが、カバンの膨らみ具合が半端ないのだ。横に縦にパンパンに膨れ上がっている。

しかもご丁寧にカバンの中身は全部机の上に出してある。つまり空のカバンが膨らんでいるのだ。

不思議な光景に生徒たちは、カバンを突っついてみたりカバンの中に入れていた、没収されかねないものを隠している。

隆とともに教室に戻ってきた拓馬が呟いた。

「またなんかやったのかよ」

「俺のカバンも膨らんでるじゃん」

「あ、ホントだ」

自分の無罪を証言するように、隆は自分のカバンを指さした。机の横に掛かっている隆のカバンもパンパンに膨らんでいた。

「じゃあ犯人は誰だ？」

拓馬が考えていると、教室の中で破裂音が鳴った。

「うおっ！ ビビッたー！」

生徒の誰かが自分のカバンの中身を確認しようとして、チャックを開けたときに中に入っていたものが破裂したらしかった。

カバンの中に入っていたのは風船だった。それもご丁寧にカバンを開けた時に破裂するように細工がされてあった。それを見て、他の生徒もカバンを開けていく。そのたびに「パン！ パン！」と教室中で破裂音が鳴り続けた。

「なんだこれ！ 楽しい！」

「私風船が割る音ダメなんだよね。キャッ！」

「俺のやつ割れないで空気だけ漏れてきたし！」

なんかみんな楽しそうです。その教室の様子を見ていた拓馬が隆の顔を見た。拓馬は最初から最後まで隆が主犯だと思っています。

案の定、ニヤニヤと笑っているの、拓馬の中で隆が犯人であることは確定事項となった。

「やっぱり隆だろ」

「まあこんなことするのは俺しかないからな」

「いつやったんだよ」

「さっきの体育でトイレ行った時」

「お前大きいほうだつて言つてたじゃん」

体育でトイレに行ったときに、教室に戻ってきて、全員のカバンに風船を仕込んだということらしい。完全に計画的犯罪だった。隆のやるイタズラなので準備と計画の内容に無駄なことは何もなかった。しかしここで終わらないのが隆だ。

「さて、俺もそろそろ開けるかな」

そう言つて自分の席に行きカバンを開ける拓馬。案の定、チャックを開け始めたところで豪快な破裂音が鳴った。

そんな破裂音が鳴り響いた授業間の休み時間はあつという間に終わり、次の授業の先生が来たことによつて全員が落ち着きを取り戻して大人しく席に着いた。

次の授業は数学。担当の先生は女の先生です。

「はい。では授業を始めま、キャッ！・・・今の音は何っ？」

先生が教卓に教科書等の荷物をドサリと置いたときに、またしても破裂音が響いた。

隆は教卓の中にも仕掛けていたのだ。生徒たちは突然の破裂音に笑いを堪えている。先生は何事かと思い、辺りをキョロキョロとしていた。

「先生どうしたんですか？」

一人の生徒が聞いた。

「今なんかパンつて音しなかった？」

「え、してませんよ？」

「してないしてない」

「じゃあ先生の聞き間違い？」

「先生疲れてるんじゃないの？」

「幻聴聞くとかちよつとヤバイよねー」

相変わらずのノリの良い生徒たちである。当の先生は、疲れているのかしら？、と首をかしげている。

そんなこんなで隆の設置した風船トラップ事件は無事終了した。

その日の夜。

隆は部屋に戻るといつものようにベッドに横になった。そして一人反省会をする。いつもならこんなことはしないのだが、今日は少し失敗してしまったので反省会である。

『結局、拓馬と黒木は気づかないまま帰っちゃったなあ』

頭の中でたればなことを考えるが、今日はいつもより大掛かりなイタズラになってしまったので、隆も疲れていた。そのせいもあってか、すぐに深い眠りへと引きずり込まれてしまった。

拓馬と名波が家に帰ってカバンの中を見ると、拓馬には『黒タイトの種類について』の本、名波には『ドM入門』の本がそれぞれ教科書に混ざって入っていたのはまた別のお話である。

嬉しさ余ってイタズラ100倍（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とかありましたら書いていただけると執筆意欲とかが高まります。

久々にイタズラらしいイタズラ（ちょっと大掛かりすぎた）の回でした。

隆はちょっと変わったタイプのツンデレだと僕は思ってます。

では次回もお楽しみに！

完全敗北

昼休み。

学生にとつて唯一、めんどくさい授業のことを忘れることができる憩いの時間である。

今日も隆の席に拓馬が椅子をくつつけてお昼ご飯を食べている。

隆は学校に来る途中に買ったパンをもそもそと食べている。

「今日もパンなのか？ 栄養偏るぞ？」

「腹に入ればみんな同じだ」

「いやいや、そーゆーことじゃないじゃん」

そう言つて横に座る拓馬は、自分で作ったお手製弁当を食べている。

「相変わらず料理上手いよな」

「そうか？ これぐらい普通だと思うんだけどなあ」

拓馬の弁当を覗きながら隆がうらやましそうに言つ。

誰もが意外に思つ『拓馬』と『料理』の2文字の組み合わせ。母親の代わりに料理もこなしている拓馬は、毎日学校にお弁当を作つてきている。家計節約の為だとかなんとか。良いお嫁さんになれそうですね。

「どう考えても普通じゃないだろ。毎日のお手伝いの賜物かね？」

「まあそうかもしれないですね」

すこし照れながら言う拓馬。

前に隆が拓馬に自分の分も弁当を作つてきてくれと頼んだところ、きつぱり断られた。材料費が高くなるのが原因だそうだ。家庭的で

すね。

今日の拓馬の二段重ねの弁当は、上の段に、もやしとピーマンの炒め物、玉子焼き、昨日の晩ご飯の残りのほつれん草のおひたし、同じく残りの春巻き。下の段には白いご飯がぎっしり敷き詰められていて、梅干が真ん中に置いてある。

「玉子焼きが食べたいなー」

「仕方ないなあ。頼むならちゃんと敬語で頼めよなー」

そう言いながら玉子焼きを一つ箸で掴み、隆の口元に運んでいく拓馬。いわゆる『あゝん』という状態である。

実は黙っていればモテる二人がこんなことをしていると若干問題が・
・それはまた別の話。

「何してんの？」

購買から戻ってきた名波が、ちょっと気持ち悪いものを見るような目で二人を見ている。名波にそっちの気はありません。

「いや、拓馬の弁当があまりに旨そうだったから、おかずを分けてもらってんだ」

「へえー。木下って弁当持ってきてるんだ。うちはお母さんがいつも作ってくれるんだけど、今日はちよつと寝坊しちゃったから購買

ー

「聞いてないけどな」

「ちよつとぐらい聞いてくれたって良いではないですか！」

勝手に自分の家の弁当事情を話し始めた名波を、二人がバツサリと切り裂いた。

「こいつはお前のところの弁当事情とは違っんだよ」

「どういうこと？」

「それを語るには血と汗と涙の物語があるんだけど」

「そんなないだろ。ただ家計のために弁当作ってきただけだよ」

何故か悪ノリし始めた隆を制して拓馬がオチを先に言ってしまった。そのわずかな間に名波が隆の前の席に座る。ちなみに名波が今座っている席の男の子は、隣のクラスでお弁当を食べています。名波は自分で買ってきたパンやらパンを並べて食べ始めた。

「えっ？ 木下って自分で作ってきたの？ 何か意外かも」

「よく言われる」

「何気に手先起用だったりするからな。ギャップに惚れるなよ？」

「なんだよ隆。別に黒木が俺に惚れたっていいじゃんかよー。あの黒タイツに包まれた美しい足が俺のモノになるんだぞ？」

「大丈夫。絶対惚れないから安心して」

断固として惚れないことを決意した名波であった。

「それはそうと自分でお弁当作るのって大変じゃないの？」

「まあ大変だけど、もう結構続けてるから慣れてきたかな」

「ふーん」

「それをお前の母さんも同じことしてるんだから、お前も女なら拓馬を見習って少しは料理でもしたらどうだ？」

「私料理できるよ？」

「「えっ！？」」

よっぽど意外だったらしく、拓馬と隆が同時に名波を見る。

「りよ、料理って、あ、あれだろ？ インスタントラーメンとかだ

る？」

「あー、そういうことか。な、なら俺も納得だ」

「なんでそんなに意外そうなのさ。私だって料理ぐらい出来るんだからねー」

持っていた焼きそばパンに豪快に噛みつく名波。

名波は小さい頃からお母さんの手伝いとして台所に立っていた。これも『妹達に美味しいものを食べさせたい』という心情からだったりする。

そんなこんなで黒木母から色々と料理の英才教育を受けていた名波は、今の年齢になる頃にはたいていの料理はできるようになっていた。

「じゃあ最近何作ったか言ってみろよ」

本当に信じたくないらしく、隆が名波に質問する。

「昨日ドリアを作りました」

「ど、どりあ……。あんな難しそうなものを作れるなんて……完敗だ」

「へへーんだ」

「ドリアって難しいか？」

拓馬の言葉も隆には届かなかっただけで、最後の一口のパンを寂しそうに食べると、しょんぼりしていた。

隆は全く料理ができないので二人がすごい高いところにいる存在に思えた。

完全敗北（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変喜びます。

実は第一話から日にちが全然進んでません。
一週間経ってませぬ。

次回もお楽しみに！

名波を襲う謎の影

黒木名波はほとんどの全校生徒が認めるほどの美少女である。

影では、ファンクラブが存在するほどの美少女である。

そんな名波は、金曜日の帰り道から、土、日、月と謎の視線を感じていた。名波はそういう視線には気づきにくいタイプではあるが、今回の視線は今までのものとは少し違った。今までみたいに『気づかないように』という隠れている視線ではなく、『気づいて欲しいけどバレたくない』という頭隠して尻隠さずな視線だった。おっちょこちょいと言えばそれまでだが、本人が気づいてしまったために、気になって仕方ない日々が続いた。

名波も気にはなるが誰に相談すればいいのかわからないし、そもそも自分の勘違いだった場合に迷惑をかけてしまうことになるので、家族にもなかなか相談出来ずにいた。

頼みの綱である拓馬と隆に相談しようかと思ったのだが、連絡先もわからないし、土日を含んでいたために学校で相談することもできなかった。でもこんなしょうもないことに二人を巻き込んでいいものかと名波は考えていた。

そして何も行動しないまま月曜日の昼休みになった。

名波が視線を感じるのには、学校以外の場所に居る時だった。帰り道はもちろん、部屋の中にもどこからかの視線を感じるの、怖くて部屋のカーテンは締めっぱなしだ。

日曜日に双子の妹達と買い物に行ったときにも視線はずっと感じていた。その時から名波の疑問は確信に変わった。どう考えてもこれはストーリーカー行為というやつだ。

この時までは迷惑を掛けたくないと思っていたのだが、真面目で優しい名波は巻き込みたくないと思うようになっていて、なおさら相談しにくい状況に自分自身を追い詰めていた。

そして、月曜日の昼休みに至るまで、学校では隣の席の有紀にあい

さつした以外は誰とも話していなかった。

そんないつもとは異なる状態の名波を、この二人が見逃すわけがなかった。

そう。ファンクラブの会長こと吉永春樹とそのファンクラブの女性幹部こと竹中有紀である。

『黒木名波ファンクラブ』を支えている重鎮の二人がこの名波の違和感を感じ取れないわけがなかった。

会長の春樹に至っては、名波の憂鬱な気配を感じて、有紀に定期的にメールをして名波の状態を報告させていたぐらいである。

それに応えた有紀も前回の作戦で改心したのか、春樹の目となって逐一名波の細かい情報をメールで送り続けた。今日の登校直後から昼休みまでで、軽く200件ぐらいのメールが送受信されていた。

そして今。

ファンクラブの緊急会議が、視聴覚室にて行われていた。

視聴覚室の鍵はもう一人の男性の幹部が管理している。生徒会長という表の顔を持つ男性幹部は、学校中のほとんどの鍵を使用することが出来てしまう強者だ。

視聴覚室内には、会長、幹部2人、会員7人の計10人が揃っている。数名は部活の集まりがあったり、放送部の仕事があったり等で集まれなかった。

「さて急な招集に集まっていたいただき感謝する。時間がないので手短に話すが、我が名波姫の様子が少しおかしい。この中で、名波姫に何かあったか心当たりのあるものはいるか？」

会員達は互いの顔を見合わせるが、知っている人間はいない様子だった。

春樹も幹部の二人を見るが、ただ首を横に振るだけだった。

「そうか・・・皆、どうしたらいいと思う？　これは一大事だ。このファンクラブの情報網をもつてしてもわからないとなると・・・」
「会長。よろしいでしょうか？」

会員達の前であからさまにうなだれる会長に声をかけたのは女性幹部の有紀だった。

「どうした？」

「ここは相沢隆と木下拓馬にも応援を頼んでみるのはどうでしょうか？」

会員達から賛否の声が上がった。

「どうしてあいつらに頼むんだ？」

「どう考えても俺たちよりも名波姫と仲がいいじゃないか」

「何か事情がわかるかもしれないしな」

「だからって我々の敵であるあの二人に頼むなんて」

その女性幹部の発言を聞いた男性幹部がおずおずと手を挙げた。

「僕もその方がいいと思います」

「お前もか・・・」

「相沢は名波姫を困らせるようなことをたくさんしているが、頭の回転と行動の段取りの良さは目に余るものがある。木下も変態という欠点を抱えてはいるが、人一倍優しいし、相沢と組むことで倍以上の力を発揮することは間違いないと思います」

さすが生徒会長と言わんばかりの名演説だった。ちなみに生徒会長として生徒一人一人のことを知っておくのは常識中の常識ですね。息をするのと同じくらい当たり前前のことですな。

そんな男性幹部の発言を聞いて何も言えなくなる会員達。そして春樹が口を開く。

「・・・わかった。今回は緊急事態ということもあり、あの二人に協力してもらうことを承認する。しかし我々のモットーである『清く正しく裏方に』を守ることを忘れるな！ どんな時でも我々は影で名波姫をサポートするのだ。黒子が目立ってはいけないのだ」
「わかりました。ではあの二人には私の方から伝えておきます」
「うん。任せたぞ。女性幹部よ」

そう言ってファンクラブのメンバーは静かに視聴覚室を後にした。

名波を襲う謎の影（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると踊り狂います。

今回から少し物語が動きます。

シリアスチックですが方向性は変わりません。
コメディ（笑）です。

では次回もお楽しみに！

3人の友情

「・・・というわけなんだけど、二人とも何か知ってる？」

フアンクラブの緊急集会のあと、廊下に拓馬と隆を呼び出した有紀は、フアンクラブのことを伏せながら名波のことについてたずねた。

「黒木？ ああそういえばなんか悩んでるみたいだったな」

「そういえば今日は一回も俺たちのところ来てないな」

『そういえば』と名波のことを今思い出したかのように話す二人に、有紀は本当にこの二人が適役だったのかと、自分の提示した意見を疑ってしまった。

「そうか。そういえば様子が変わったな」

「だな」

「ちよつと、そういえばそういえばって二人とも名波姫のことが心配じゃないの？」

「そんなこと言ってもいつもは向こうからつかかってくるから、今日は来ないなあってぐらいで・・・」

「・・・姫？」

「あ・・・」

質問に答えた拓馬の後に、見事に聞き逃していなかった隆が聞き返した言葉に思わず固まる有紀。

しかし隆からしてみれば、やっと本性をさらけ出してきたわけで、それはそれで思わぬ収穫だった。

「いや、その・・・」

「まあ気にするな。今は黒木だろ？」

「そうだよ。たとえ竹中が影で黒木のことを『名波姫』って呼んでたとしても、俺と隆はなんとも思わないって」

ニヤニヤと話す二人の顔を見て、自分が『名波姫』と呼んでいることがバレていたと知った有紀。

「あの、名波ちゃんには、その、内緒にしててね？」

念を押して拓馬と隆に言う有紀。
しかし・・・

「え？　それが人に物を頼む態度なんですか？　それに名波姫なんじゃなかったけ？」

意地悪く言う隆。拓馬は横でケケケと笑っている。これでファンクラブの敵にならないほうがおかしいですね。

「くっ！　・・・名波姫には内緒にしておいていただけますでしょうか？」

「誰に言ってるのかな？」

「相沢さんと木下くんです」

「まあもとから言うつもりないし」

ケロツと何事もなかったように、表情を変える隆と拓馬に有紀は戦慄した。

「そんなことよりも今日は黒木だ」

「一応友達だからな」

「ん？　隆と黒木って友達だったの？」

「この間、黒木に友達認定された」

「じゃあ俺も友達だな。隆の友達は俺の友達だ」

「・・・なにそのジャイアニズム」

有紀のツツコミを完全に無視して、二人はずかずかと名波の元へと歩いていった。

いきなり行動を始めた拓馬と隆を慌てて有紀が制止しようとしたときには、二人はもう手の届かない位置まで歩いていった。

そして二人が名波の席を挟むように立つと、いきなり本題を叩きつけた。

「お前なんか隠してるだろ」

「あ、べ、別に何も隠してないよ？　なんで相沢にそんなことわかるのさ」

「黒木。いつもよりも黒タイツがくすんで見える。この黒タイツソムリエの目は誤魔化せないぞ」

「どういう理屈さ！」

いつもの3割減の勢いで拓馬につっこむ名波。そんな名波に最初と変わらず、真剣な表情で二人は続ける。

「なあ黒木。俺も拓馬もお前のこと心配してるんだ」

「友達に相談しないで何が友達だ。こーゆー時のために友達がいるんだろ？」

「木下・・・相沢・・・」

「ここで話にくいなら場所変えるか？」

「ありがたいけど、もう少して授業始まっちゃうし・・・」

「じゃあ放課後なら話してくれるか？」

拓馬の言葉にこくと頷く名波。そんな3人を見ていた有紀は、や

はり自分の提案は間違っていないかったと再度改めた。
二人が席に戻るのを見てから、有紀も自分の席に戻った。

そして放課後。

密かに行われたファンクラブの会員達による人払いによって、教室には名波、拓馬、隆の3人。そして教卓の中に有紀、掃除用具が入っているロッカーに会員一名、会員の席に仕掛けられた集音マイクを通して春樹と会員の数名が近くの空き教室で耳を傾けていた。表面上で3人しか残っていない教室で名波が拓馬と隆に事情を説明した。金曜日の帰り道から変な視線を感じることに、家でも視線を感じることに、どこにいても視線を感じることに、誰にも相談できなかったこと、ストーカーだと思ふこと。簡潔かつ丁寧に話した。二人はいつもの様子とうって変わって、真剣な表情で聞いていた。この時の隆から見た拓馬は『自分好みの黒タイツの足か微妙なラインの足をランク付けしている時』と同じくらい真剣な表情だった。この時の拓馬から見た隆は『何か悪いことを考えている最中』と同じくらい真剣な表情だった。

「・・・というわけです」

「つまりストーカーに見張られているかもしれないと」

「はい」

「俺の黒タイツに手を出すとはいい度胸だな」

「ああ。俺の遊び相手に手を出すとはいい度胸だ」

「えっ？ そんなこと考えてたの？ ってゆーか私そんな扱いだったの？」

まさかの発言に驚いて二人を見る名波。二人は業火の炎を目に宿し

ている。

「さて冗談はこのくらいにしてと」

「冗談だよねー。冗談だよねー」

「まあ本当でもいいじゃないか」

「よくないよ！」

二人に話して少し軽くなったのか、名波はいつもの調子を取り戻しつつあった。

そんな名波を見て二人は本題に戻った。

「確認するが、実際になんかやられたとかは無いんだな？」

「うん」

「勘違いとかは？」

「うーん・・・勘違いじゃないと思うんだけどなあ・・・」

「なら黒木を信じよう」

「だな。信じないことには話は進まないしな。まずは犯人をおびき出そう」

「で、姿を見つけ次第確保ってことで」

「え？ そんなに簡単に捕まえられるもんなの？」

「俺を誰だと思ってるんだ」

「そうだぞ、黒木。作戦を練らせたら隆の右に出るものは居ないんだぞ」

「そうなんだ・・・」

ふふーんと、少し鼻高々に胸を張る隆。それにしても今日の隆はノリノリである。それに呼応するかのように拓馬のテンションも高い。名波はそんな二人をとて頼もしく思えた。

一方別室でマイクに耳を向けていた春樹は、近くで一緒に聞いていた会員を名波が通るであろう道にスタンバイさせていた。

これで準備は整った。

3人の友情（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると踊り狂います。

なんか意外とシリアスな展開になりつつありますが、気にしないでください。

作者はコメディ（笑）を書いてるつもりなんです。

次回もお楽しみに！

ストーカーの正体

いつもの帰り道。

名波はいつもと同じように歩いていた。もちろん作戦通りだ。いつも通りでいいと隆に言われたので、極力周りをキョロキョロとしないように気を付けて歩いている。

校門を出てすぐぐらいから、またいつもの視線を感じるようになった。少し怖かったが二人がついてくれるため、いつもよりは怖くなかった。

その二人だが、少し前に拓馬、少し後に隆が隠れながら歩いていた。ちなみに3人の知らないところでは、春樹と有紀が隆の更に後ろ、会員の一人が拓馬のもう少し前、会員の二人が名波の歩いている道の1本隣の左右の道にそれぞれ一人ずつが配置されている。会話の内容等は拓馬と隆の襟元に取り付けられた小型マイクから盗聴している。

なんやかんやでかなり的大がかりなことになってしまった。もちろん3人の知らないところでだが。

「あ、そうだ」

隆に言われていたとおり、視線を感じたタイミングでポケットに入れておいた携帯で隆と拓馬にそれぞれメールを送る。メール自体はもともと作成しておいたので、手探りで操作して送信した。メールアドレスと電話番号はさっき教室で交換してました。

それを聞いていた会員の何人かとロッカーに隠れていた会員が羨ましく思っていたのは内緒です。

名波からのメールを受信した二人はそれぞれがいる場所からキョロキョロと辺りを見回して、怪しい人物が居ないかどうかを探す。し

かし怪しい人物は特に見当たらない。

隆は考えた。

視線を感じているのに怪しい人物がいらないとはどういうことか？

自分達は何か間違っているのではないか？

そう思った隆は少し思考を変えて考えてみた。

もしかして・・・男じゃない？

今までの名波から聞いた内容から『怪しい視線』変態『拓馬』男』と決めつけていたが、何も名波は男からだけではなく、有紀のように女性からの評判も良い。

その考えを拓馬にもメールで送った。そのすぐ後に拓馬からメールではなく、電話で返信があった。

「もしもし。なんで電話したんだよ。バレたらどうすんだ」

「こちら拓馬ー。犯人確保しましたー」

「はあ？」

思わず変な声が出てしまった隆。まさかこんなにもあっさり捕まえてしまうとは。さすがの隆も想定外だった。

拓馬が名波にも連絡するということで、電話を切って拓馬の元へと急いだ。

途中、名波と合流して拓馬の元へと到着した。犯人の少女は名波と隆に顔を見られたくないのか、拓馬に手を掴まれたまま後ろを向いている。

「どこにいたんだ？　ってゆーか捕まえるの早すぎね？」

「いや、隆からメール貰う前までは、ずっと男が犯人だと思ってたからさ。でも女かもって送られてきて辺りを見回したら、制服はうちの学校の制服なのに、見たことがない黒タイトの美少女がいるではないですか。で、よく観察したら、黒木のことをじっと見てるから現行犯逮捕したわけ」

「まさかこんなところで拓馬の変態が役に立つなんて・・・」

「・・・・・・・・」

「ん？ 黒木？」

「・・・こんなところで何やってるの？」

少し怒気を含んだ声が名波から拓馬に発せられた。

「え？ いや、その、さっき話したとおりじゃん。も、もしかして黒タイツ観察してたこと怒ってるんですか？ それなら謝りますか・・・」

「何やってるのって聞いているの！ 桜っ！」

「・・・・・・・・桜？」

名波の言葉に首を傾げる拓馬と隆。名波は拓馬が掴んでいた少女に歩み寄ると、肩を掴んでこちらを向かせた。その犯人の顔は、よく見ると名波の小さい頃を彷彿とさせる顔立ちだった。隆はその顔を見て少し驚いた。

「もしかして妹か？」

「は？ 妹？」

「うん。妹の双子の桜。ねえ桜？ 遥も近くに居るんでしょ？」

「お姉ちゃん・・・遥ー！」

桜が遥の名前を呼ぶとどこからともなく、遥が道路沿いの家の塀を飛び越えて参上した。

驚く拓馬と隆をよそに、名波は桜と遥を自分の目の前に並べる。

そして犯人と呼ばれた桜に、名波がなるべく優しい声で話しかける。

「何してるの？」

「その・・・何もしてないよ？」

「じゃあこんなところで何してるの？」

「えっと・・・歩いてただけ・・・です」

「本当に？」

「・・・・・・・・」

黙り込む桜。それを見ていた遙が口を開いた。

「あのね、桜と二人でお姉ちゃんのことを・・・その、監視してたの」

「「監視？」」

拓馬と隆がそろって聞く。

名波は合点がいったらしく頭をポリポリとかいている。

「おい黒木。どういうことだよ？」

「あのね、お姉ちゃんは悪くないの。私たちが勝手にやったことだから」

「私と遙の二人で決めたの。だからお姉ちゃんは無関係なの」

「そうじゃないだろ。お前らの姉ちゃんは悩んでたんだぞ？ もしかしたらストーカーかもしれないって悩んでたんだぞ？」

「「うう・・・」」

「なあ、俺にもわかるように説明してくれないか？」

隆はなんとなく察したらしいが、拓馬の頭では理解するのが難しすぎたのか、説明を要求している。

そんな拓馬に名波が説明する。

「多分、私に仲良しの友達が出来たって聞いたからだと思う」

「へ？ そんなだけ？」

「お前にとってはそんなだけかもしれないが、この双子にとってはそ

「んだけじゃなかったんだよ」

「前にご飯食べてるときに、相沢と木下の話をしたことがあって、私が『いじられてるけど、楽しいよ』って言ったら、『それじゃイジメじゃん』って二人が言ったことがあったから、多分それが原因だと思う」

「・・・そこまで家族に言う必要があったのか？」

「だって誰かに言いたかったんだもん」

「なんか他にも友達とかいるだろ」

「私友達いないよ？　なんかみんなして美少女美少女って言うから、知らないうちに近寄りがたい人ってイメージが付いちちゃってるみたいで、学校で仲良しの人は多いけど、休みの日に遊んだりするような友達はいないかな」

まさかのぼっち宣言に驚く拓馬と隆。そして友達認定されていなかったことにガツクリとする有紀。

「で、桜と遥はそれを聞いて、私のことを見てたんだと思う」

「そうなのか？」

「「ごめんなさい・・・」」

拓馬が聞くと、今にも泣きそうな声で双子が言った。

「とりあえず・・・ここじゃなんだし場所を変えようか」

そう言って移動を開始する5人。隆は拓馬の襟元についた小さいマイクを、拓馬に気づかれないように取った。そして自分の襟元にもついているマイクを取ると二つのマイクに向かって小さな声で言った。

「続きは学校で話してやるよ」

マイクをその場に落として、他の4人と共に歩いていった。
さすが隆さん。ファンクラブの存在を知っているのか知らないのか
まではわからないが、尾行の尾行を見破るのは得意ですね。

ストーリーカーの正体（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

最近、自分で書いておいてアレですが、名波が可愛すぎてツライです。

次回もお楽しみに！

一難去ってまた一難

近くのファミレスに移動した5人は席に案内されるなり、ドリンクバーを5個頼んでグラスに飲み物を入れて落ち着いた。

通路側から拓馬、隆の順。向かいに通路側から名波、桜、遥の順でそれぞれ座っている。

「いやーそれにしても、さすが黒木の妹だな。こんなに黒タイツが似合うなんて素晴らしいことだぞ」

席に着くなり、もの凄い笑顔で拓馬が言う。

褒められているのか、ただの変態発言なのかわからない双子は微妙な笑みを浮かべている。

「ちょっと！ うちの可愛い妹達をからかわないでくれる？」

「からかってないですー。褒めてるんですー」

「木下が褒めても全部変態発言にしか聞こえないのよ！ この変態！」

「なんだと！ 恩を仇で返すとはまさにこのことだな！」

「恩はこの代金奢るからそれでいいって言っただじゃない！」

「お前らはなんでケンカしてるんだよ」

テーブル越しに言い合う二人を見かねて、隆が仲裁に入る。

「本題はそこじゃねえだろ。双子に色々と聞かねばならんことがあるんだろ？」

そう言っただけ名波のほうを見る隆。そうだった、と乱れた襟を正す名波。

「で、どうしてあんなことしたの？」

「それはお姉ちゃんが心配だったから・・・」

「あれだろ？　姉ちゃんが俺たちに取りられるとでも思ったんだろ？」

「ちよつと違う」

「違うんかい」

拓馬の推測が見事に外れた瞬間だった。

双子の話によると、名波がいじめられていると思っていた双子は、名波を監視して犯人をとっ捕まえていじめをやめてもらおうと説得しようとしていたらしい。

結局、双子も隆達も両方が両方を捕まえようとしていたらしい。

「じゃあ俺たちがこの双子に捕まるところだったってこと？」

「そういうことになるな」

「でも俺があつさり捕まえちゃったと」

「まあ中学生なんだから仕方ないだろ。俺には敵わんよ」

何故か胸を張って自慢げにする隆。実のところ、隆が立てた作戦はあのあと色々と続いていくはずだったのだが、半分もいかないうちに解決してしまったので作戦自体が無意味になってしまったとも言える。それでもここまで自慢げにできるのは、少しテンションが高いせいなのかもしれない。

「それにしても黒木はあんまし怒ってないのな」

双子の横で楽しそうに会話を聞きながら、飲み物を飲んでいた名波に尋ねる。

「んー？　だって可愛い妹達だもん。今回だって私のこと心配して

やってくれたことなんですよ？ 姉冥利につきるよー」

「お前、ホントに姉バカだよな。うちの双子もこのくらい可愛気があればなー」

「隆のこの双子だって可愛いじゃん。ちょっと変だけど」

「ちよつと変って何が？」

「なんか平気でキスしたりとか『愛してるよ』とか言い合ってるんだよ。まるで恋人同士みたい」

隆が答えると、思わず3人で双子の方を見てしまった。

その視線に遥が耐え切れなくなつて下を向く。代表して桜が答えた。

「わ、私たちはそんなことしてませんっ！」

「『だよねー』」

「つてゆーかそれが普通だよな。きつとうちが変なんだ」

そう言つて飲み物を飲む隆。そんな隆を物珍しそうな目で見る双子。

「なんだ？ どうかしたか？」

「いや、なんでもないです」

双子の視線に気づいた隆が問いかける。

双子は考えていた。もしも自分たちに兄がいたらこんな感じなんだろうかと。しかし、双子には名波という大好きな姉がいるので、こんなぶつきらぼうな兄はありえないと思つている。でも『姉』はこんなんでも『兄』となるとまた違うものなのだろうか、などと考えているが、口が裂けても名波の前ではそんなことを言えないと思つているらしく、曖昧に返事をしてごまかした。

ちなみに変態拓馬は双子の兄思想の中には入りませんでした。

「私も相沢家の双子見てみたいなあ」

「あ、俺も久々に見たい！」

「人の家の双子を見せ物みたいに言うな。まあ見せてやってもいいけど、いつにする？　ってゆーかあの二人が大人しく家にいるかどうか・・・」

「じゃあ明日の放課後は？」

なぜか笑顔の名波。自分の家以外の双子を見るのが初めてなので、少し興奮気味です。

そんな姉を見て双子のテレパシーが始まりました。そしてそのテレパシーの結果・・・

「私たちも行きたいです」

双子も参戦表明。

「はあ？　お前らも来るのか？」

「ダメですか？」

「いや、断る理由はないけど・・・」

「なら明日の放課後にお姉ちゃん達の学校の前で待ってますね」

「え、ああ・・・」

「じゃあ私と遥はこれで帰ります」

「えー。なんで先に帰るのさー。お姉ちゃんと一緒に帰ろうよー」

行く手を阻んだ名波がブーブー言っている。しかしそんな名波の扱いに慣れているらしく、桜と場所を代わった遥が少し恥ずかしがりながら名波に言う。

「あのね、私たちはお姉ちゃんのこと大好きだよ・・・」

「うんっ！　お姉ちゃんも2人のこと大好きだよっ！　気を付けて帰るんだよー！」

ぺこりと3人におじぎをすると出口のほうへと歩いていった。その2人を席から見送った隆は、はぁ、と息を吐いた。そんな隆に拓馬が声をかける。

「どうした？」

「・・・俺、年下の女の子ってダメだ」

「嘘っ！ 初めて聞いたぞ？」

「俺も今初めて知った。押されると押し切られちゃうことがわかった」

「じゃあさっきの返事も？」

「ホントは断りたかったんだけどなあ・・・」

思わぬ隆の弱点に驚く拓馬。そんな拓馬とは対照的に、ニヤニヤと笑みを浮かべている名波。

「へえ〜。相沢くんはうちの双子ちゃん達が苦手なんですか〜」

「キモイ。こっち見んな」

「よーし！ ここは名波ちゃんが相沢くんのために双子ちゃんを連れていってあげちゃうぞ」

隆の暴言を華麗にスルーした名波は、いつもの仕返しとばかりに双子を必ず連れていくと心に誓ったのであった。

そんな二人を見ながら、うちも双子が良かったなあ、と心の中で呟いた拓馬であった。

一難去ってまた一難（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

双子襲来！

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8277z/>

イタズラ男と黒タイツ男

2012年1月14日15時48分発行